

平成十四年十一月十九日（二十二日

書写と装訂

—写す 裁つ 練じる—

宮内庁書陵部

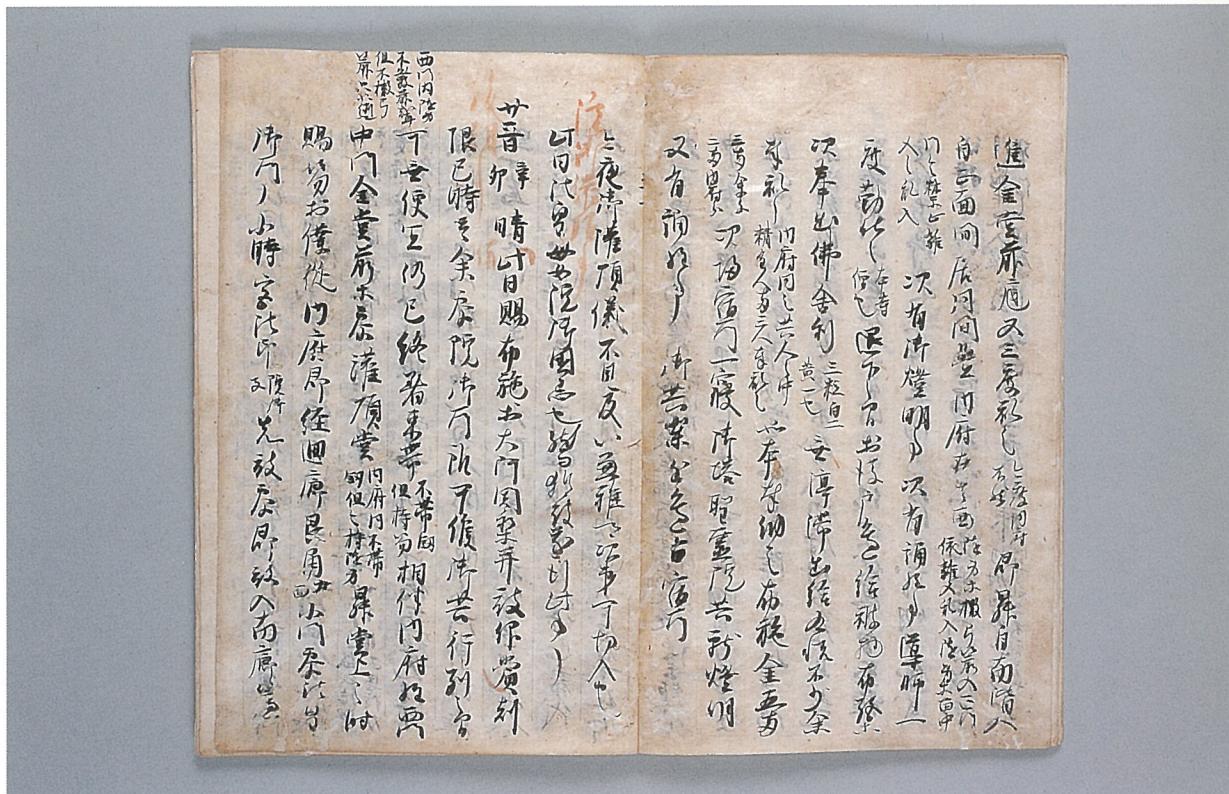




12-1

12-1 玉葉

平安末～鎌倉初期の公卿であり、九条家の祖である九条兼実の日記。粘葉装の写本である。粘葉装は書写してから製本するため、錯簡を防ぐため糊代部分に丁付する。丁付の上部に見られる墨線は界線の位置を示したもので、製本に際して文字高を揃えるためのものである。この九条家本『玉葉』の前表紙と裏表紙には、表紙の端の損傷を防ぐため竹製の八双がついている。



12-2

12-2 玉葉

展示箇所は文治3年(1187)8月23日条。押界が引かれているが、線を引くにあたっては1枚の料紙を半折にして、かつそれを数枚重ねて引いたようで、線がはっきり見えるものと判然としないものがある。当該本の九条家旧蔵『玉葉』は全50冊で鎌倉前期写。現存は嘉応元年(1169)～建久5年(1194)の間。表紙外題は九条道教、表紙書付は九条幸家、本文中の朱筆首書は兼実の息、九条良平の筆からなる。



18-1

18-1 二十一代集

列帖装（綴葉装）で、表紙は紺地に金泥・砂子・切箔で、山・霞・草木を描き、見返しは金箔に青金泥で波文様を描く。勅撰和歌集や和漢朗詠集は嫁入り本としてよく用いられ、該本も華麗な料紙であること、異本注記は少々あるが明らかな訂正痕の無いこと等からそれと思われる。18-2の『古今和歌集』以下『新続古今和歌集』までの二十一代集で、各勅撰和歌集は奥書を持たないものが大半の上、この二十一代集の伝来を示す識語等はないが、状態からみて室町末期の写と言えよう。なお、勅撰集ごとに納める黒漆の重ね箱は、順に重ねると金泥で描かれた草花の絵になり、外箱も黒漆に花草を配した金蒔絵を施す。

はじめに

書陵部恒例展示会は、図書課の単独開催に始まり、昭和51年度からは陵墓課・編修課を加えた三課持ち回り開催という現行のスタイルで行われてきた。このうち図書課担当年度の展示会は、専ら図書調査室の企画・立案になるものであった。しかしながら、図書課に属して図書の出納・保管を担当する出納係、修補を担当する修補係にあっては、数多くの実例に接する中で個々の職員の研鑽が積まれ、それぞれに厖大な書誌学データが蓄積されてきている。これらの永年の経験に裏打ちされた情報を展示会に反映できぬいかという要望も当然おこり、しばらく以前からの懸案事項の一つとなっていた。今回初めての試みとして、出納係・修補係の全面的協力を得て図書調査室が最終調整を行うという形で、図書課三係による協同開催が実現する運びとなったものである。以下、いくつかに括ったこのたびの展示の小テーマごとにその概要を述べておく。

1. 書写と道具

ここでは写本が作成される際に用いられる道具類を集めてみた。糸野や下敷きは字数・行数を整えるために使われるもので、書写が終われば用済みとなるが、写本自体が未完成であったり（1）、態々ひな形として作られたり（2）（3）、偶々挟み込まれたままであるなど（5）（6）、特異な要因により残されたものである。同様に（7）（8）の墨や筆も伝授資料の一部であったがために伝えられたものである。併せて料紙に界線を引くための目安にあけられた針穴の跡が顕著に残る実例（4）と、使用される形態に合わせて形を変えられる笏紙の実物（9）（10）などもお目にかける。

2. 複本作製

前のコーナーを受けて、書写された書籍が製本される以前の状態を示した。（11）は袋綴じされる本の料紙に付けられた丁付で、本製本された際には裁ち落とされる部分が、その前段階の姿で伝えられたため残されたもの。（12）は粘葉装の糊付け部に隠れていた丁付が、造本が壊れたため外に現れたもので、当部で修補を加えた際、原型を知る資料とするため敢えて未装訂のままに留めたものである。他に透き写しの技法の一つである双鉤填墨の実例から、親本の状態そのままを極めて忠実に写しているもの（13）と、理由は不明ながら大部分が双鉤のみで填墨が殆ど施されていないもの（14）を展示了。

3. 緹じ方いろいろ

ここでは様々な和本の緹じ方について、懷紙の緹じ様が絵解きされているもの（15）と、その実例（16）。紙釘装の好例（17）。結び緹じに用いられている糸の各種形態（18）～（20）をお見せする。

4. 装訂の呼称

装訂、特に綴じ方の呼称はもとより始めに呼び名が存在したわけではない。近代以降書誌学が学問的な発達を見せ、装訂の仕方が細かく整理・分類されていく過程において、書誌学者から様々な呼称が提唱されるようになった。その結果、時として一つの綴じ方に複数の呼称がなされることとなり、認識が共通化されないままかえって混乱の因となっている側面も否めないというのが実状である。ここでは江戸時代以前において装訂の仕方に言及されている資料をいくつか集めてみた。(21) (22) は「ムスピトヂ（結び綴じ）」仕立ての呼称とその実物。(23) ~ (26) は現在「列帖装」あるいは「綴葉装」とよばれている綴じ方が「大和閉（大和綴じ）」と認識されていたことを示す実例である。「大和とじ」という言葉自体は室町期にも使われているが、この呼び名はもともと「唐とじ」（中国伝来の袋綴じ）に対応する概念であるから、必ずしもある特定の綴じ方を指すものとは断言できない。しかしながら今のところ「大和綴じ」と呼ばれていたことの判明する綴じ方は皆同じ綴じ方である。そして(27) は現在「粘葉装」と呼ばれる装訂が「れつちやう閉（列帖綴じ=列帖装）」と認識されていたことが示されている例である。

5. 本の大きさと紙

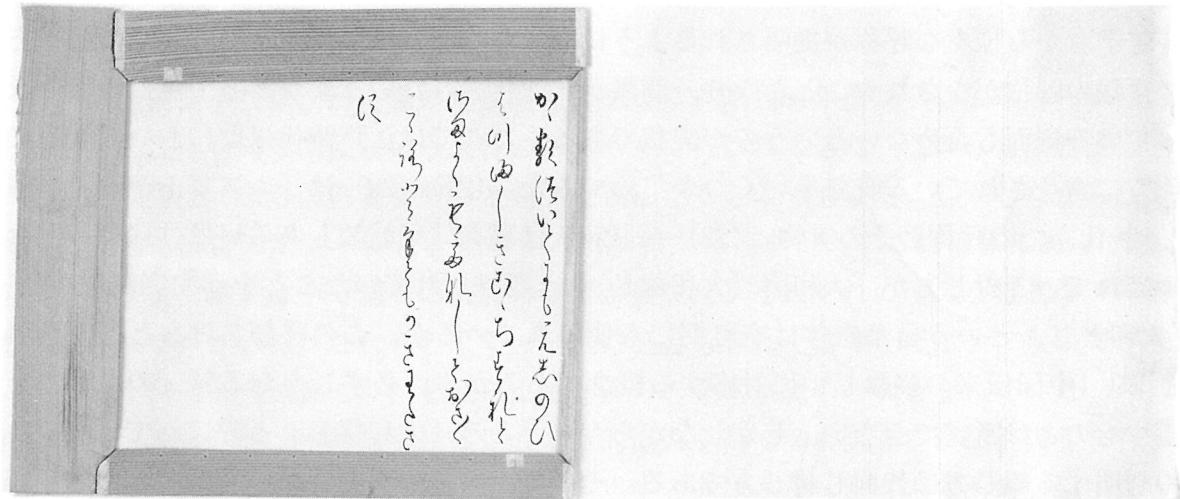
ここでは本の大きさを表す言葉として通常よく使われる四半本(28) (29)、六半本(30)、八半本(32) (33)、枠形本(31)、それに特殊な形態である袖珍本(34)の実例の中から、それぞれ原紙をどう裁断したのかがよく分かるものを選んで展示している。

6. 様々な改装

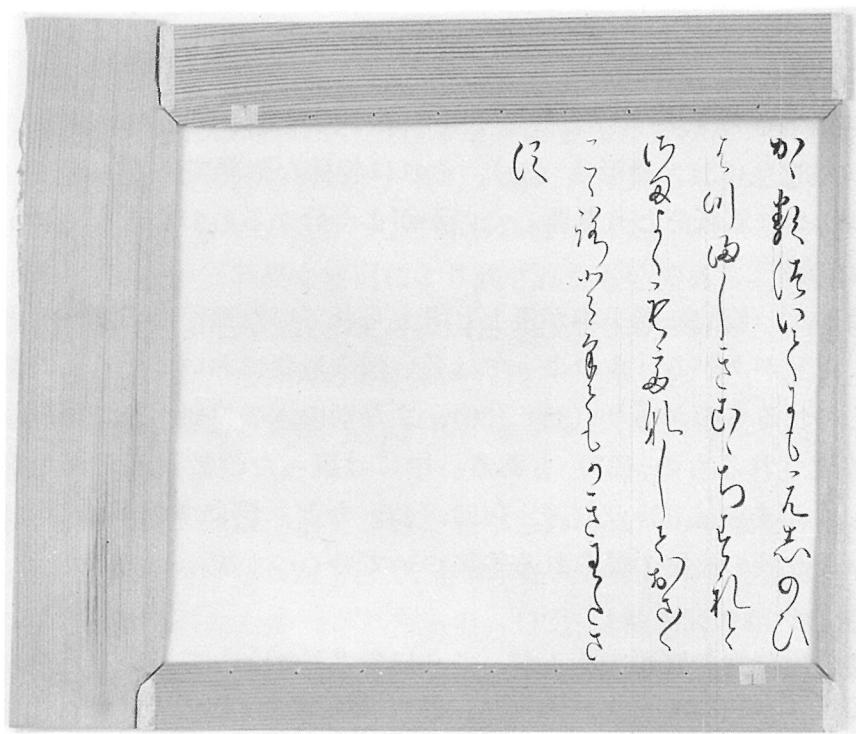
造本の形態は、一般的に巻子本が格上と考えられていた節があるが、利便性からは折本や冊子本に軍配があがる。本によっては長い伝来過程においてそうした観点から形態に変更が加えられるものがあり(35) (36)、また別の本の料紙として再利用されるに際して原型が改変されるもの(37)もある。中には凝った改装が施されたもの(38) ~ (41)、二度以上形を変えているもの(42) (43)など、実に多種多様な実例が存する。ここでは様々な改装の痕跡の見られる本についていくつか展示してみた。

以上が今回の出陳物の概要であるが、さらに参考展示として特殊な表紙が付けられているもの(44)と、特に変わった帙(45)の二点をお目にかける。これまでの展示会と異なり、展示品はいわば裏付け資料的な扱いではあるものの、候補が複数あるものについては善本・貴重本の類を中心に選んでおり、書陵部ならではの展示会となるようにも心懸けた。様々な観点から存分に御覧いただけることを願う次第である。

[書写と道具]



1-1



1-2

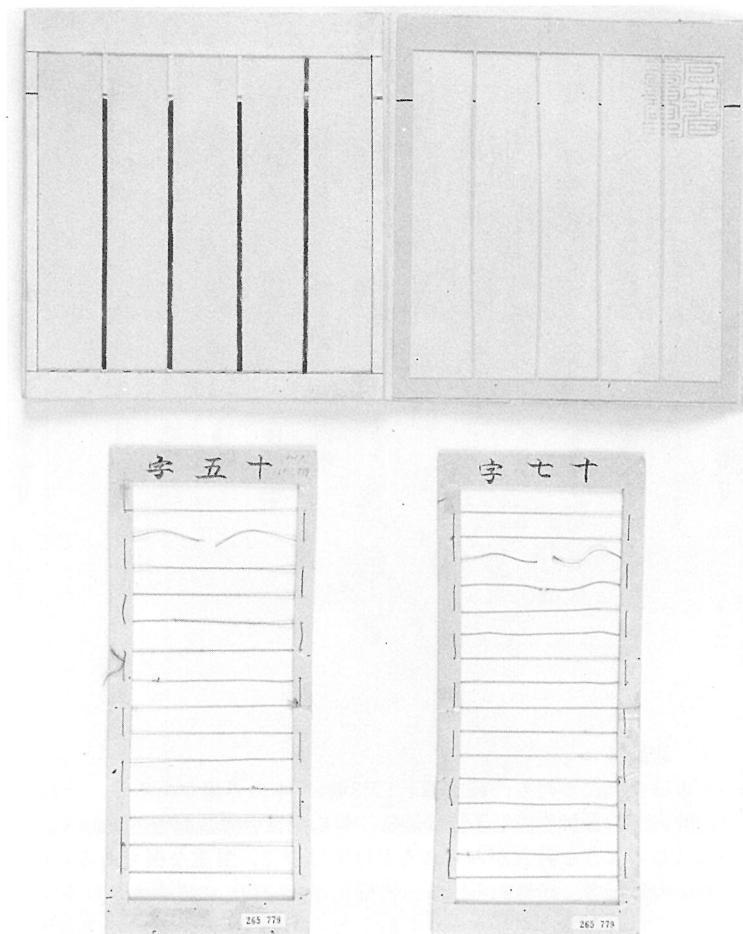
1 檜製糸野

本を書写する際、行を整えるために用いた道具。天地の枠にあけられた穴に糸をはって罫線とし、下敷の使えない厚手の料紙や、界線を持たない歌書や物語等の料紙上に置いて行の目安とした。現在糸は欠損しているが、穴の起点と終点などに残片がみとめられる。枠の端に残る紙片は組み立てた際の補強紙であろう。本糸野が付随する閑院宮典仁親王等寄合書『源氏物語』は製本されておらず、帖ごとに天地の各一箇所を糸で結び、更に各帖の天地同士の糸を数帖まとめて結び1冊とする。未装訂のまま伝わったことは、糸野の存在も含めて、書写方法を研究する上で貴重であるといえよう。本書の詳細は31参照。

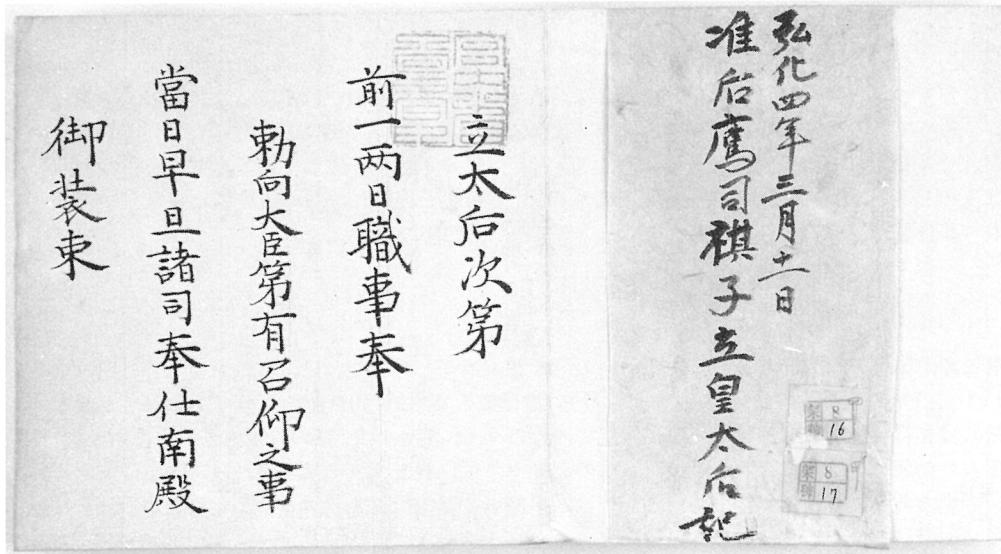
2 次第折帖竝紙界

〈次第折帖〉次第書のひな形。表紙に「御次第帖」と墨書きされ、行を整えるための紙製の枠2枚が貼りつけてある。折帖で、3面以降は白紙である。なお、帖末に「糸境 十五字十七字」と記された袋が貼付され、中に次の〈糸境〉2枚を収める。

〈糸境〉紙製の糸野で、それぞれの上欄に「十七字」「十五字」と墨書きされており、横方向に張った糸で仕切られた列数がそれぞれ17・15になっている。従って、この糸野は横方向の字配列を整えるために用いられたものであろう。17字は一般的な経文の1行分字詰めであり、写経にはあらかじめ縦界線が引かれた料紙を用いる例が多いことなどから、本品は写経用の糸野であった可能性が高い。鷹司家旧蔵。



2



3

3 祺子立太后次第

本書は、行数・字幅等が、2の紙製の枠にほぼ見合うことから、実際に用いて書写したものと推測される。鷹司祺子は仁孝天皇女御。文化8年（1811）誕生、鷹司政通の養女として文政8年（1825）入内。弘化4年（1847）3月14日に皇太后宣下を受けたものの、同年10月にわかに不例となり没した（37歳、新朔平門院）。

7

4 教訓抄

本書は全紙にわたり、縦20横4（天3地1）本の界線があるが、それら一つ一つを引く際の見当として、随所に針穴がみられる。巻子では通常、料紙を継いで装訂を整えた後に界線が引かれるが、界線を持つ巻子すべてにこのような針穴がみられるわけではなく、貴重な例である。『教訓抄』は泊近真が後代のために著した舞楽の口伝書。10巻から成り、天福元年（1233）の成立とされる。本書は室町前期の写本と推察され、完本としては現存する諸写本のうち最も古く、かつ優れた状態に保たれているものである。

5 詩懷紙寫

書写の際、行の目安をつける最もスタンダードな方法は、あらかじめ界線が引かれた厚紙を料紙の下に敷いて筆記するというものであろう。こうした野線入りの下敷は、書写者が自分で用いる料紙に合わせて作成したと思われ、日記や手控えなどの遺品中に多く残存している。8行の下敷が付随している本書は、古代から近世にいたるまでの皇族・公家の詩を収集・書写したもので、『和漢兼作集』からの抜粋や、寛永年中の仙洞七夕御会における作詩等を収める。

6 松殿御記

江戸初期の公卿松殿道昭自筆の日記。道昭は九条幸家の男で初め道基と称した。兄に道房がいる。日記は寛永18年（1641）から21年に至るもので3冊に及ぶが、うち1冊は寛永18年9・10月記の草稿である。また寛永20・21年記の冊には10行罫線の下敷が付随する。日記の内容のうち、寛永18年8月の將軍家若君（徳川家綱）誕生に際し、慶賀の勅使一行と共に江戸へ赴いた道中の記録や、紹仁親王（後の後光明天皇）元服に関する記事などは特に詳細である。寛永18年以降、道昭一代は、摂関家として松殿を名乗ることを幕府から許されたが、正保3年（1646）、32歳の若さで没している。

賤星河秋真

詩題中取

此夜新涼何不遙望河
月落在南樓長生初
始今移古吟裏誰言
一夏秋

謹候尊翰伏希

三
覽

壹品集

滿城乞憲領春色

丁巳之新數才毫

端章風景初知僅句

文獻

中門深一丈家氣色後入中門望而如東作
因爲他中人酒前不入中門列至三列
於之一列六位一列外記史一列而西自下而
酒七列奏膳一列退之列分內府雜列五梅樹
酒八列下列屏前酒客之列傍以御門
向主余指掌奉酒而酒列而西自下而
右四星門外事興肉內賓酒人之招伴而酒
金光臺在左酒之處副長中人不許并酒及酒常
列立中門外酒上院司酒中酒之後完四向主
方一人酒氣色為異自中門向方坐而出進

作因金龜才人六橫臚下入內列五色面服
補了四個腰臚下復弄在下床下也殺雞了
海院教孔源到流拜孔方小朝拜橫臚
下列立章有和詔中所立章有和詔
一人為恤不橫臚下竹長橋園下進立清
嘗被立庭金部庫後

卷之三

校政
卷下

卷下

左傳

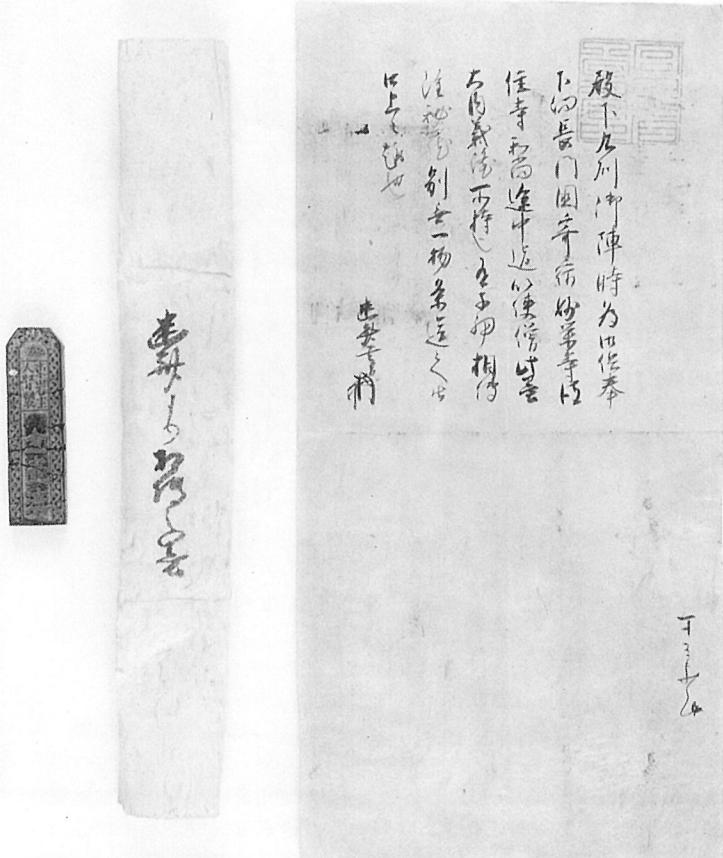
卷之三

寒秀

卷之三

7 幽斎相伝之墨

細川幽斎が八条宮智仁親王へ相伝した唐墨。智仁親王は慶長5年(1600)に幽斎から古今伝授を受けたが、墨の相伝がその時であったかどうかは不明である。幽斎自筆の附文によれば、墨は幽斎が豊臣秀吉に従って長門国に下向した際、同國妙栄寺の僧より贈られたもので、本来は中国地方の大名大内義隆の所有品であったという。幽斎著『九州道の記』には、天正15年(1587)5月11日、義隆終焉の地である深川大寧寺を一見した後、妙栄寺に宿したと記されている。墨についての記述はみえないものの、16世紀前半、積極的に対明貿易を行った大内氏が所持した品である可能性は高い。墨銘「祁邑葉璣精造金壺清／東岩主人督製金壺清」

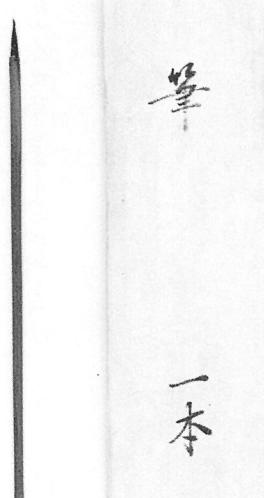


7

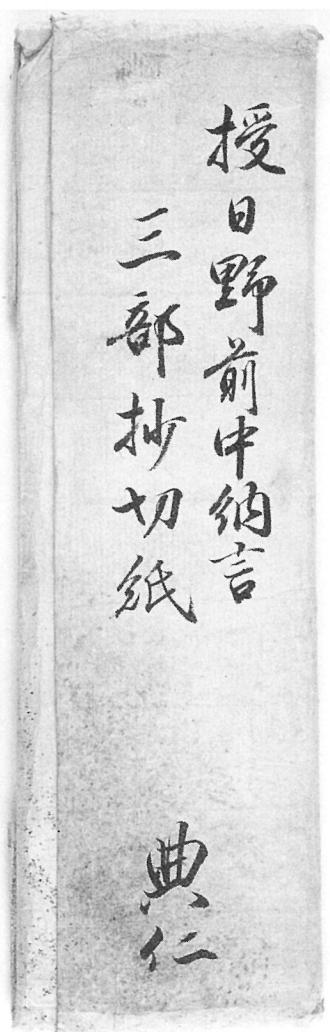
8

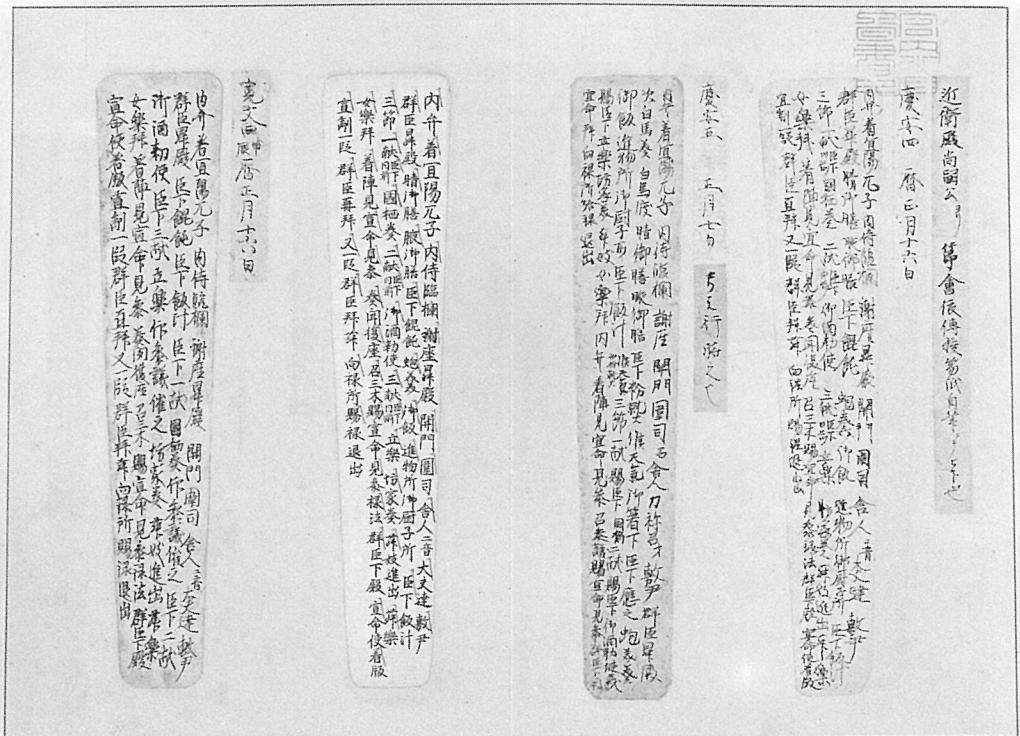
8 三部抄切紙

『詠歌大概』『百人一首』『未来記・雨中吟』などから成る『和歌三部抄』は定家歌学の神髄を伝えるという意識のもとに尊重された歌書で、近世以降、その秘説伝授は古今伝授を受けるための一階梯として重んじられた。師から弟子へ秘説を伝授する際には、一枚の料紙を裁断した切紙が利用される。本資料は、天明3年(1783)3月28日、閑院宮二代典仁親王から前中納言日野資枝へ三部抄伝授が行われた際の切紙と、その時用いたと思われる筆である。



一本





9

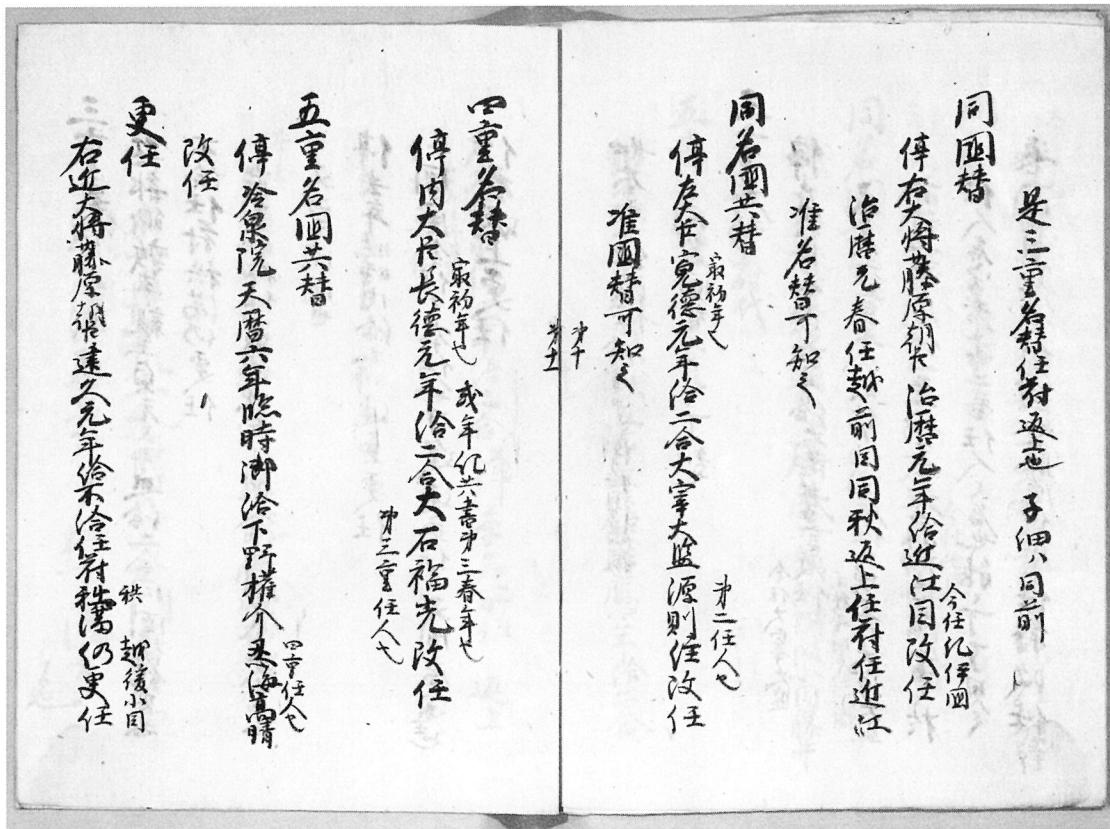
9 箔紙類集

朝務や神拝などに際して官人が威儀を正すために持つ笏は、本来は儀式の要旨を記入するための忘備の具であった。笏紙とは、簡略な次第を書いて笏の内側に貼った紙のことであり、儀式に臨む上卿などがあらかじめ笏の大きさに合わせた紙に記入、笏に貼付して式中に参照した。本書は鷹司家に伝わったもので、68枚の笏紙が貼り継がれており、先例参考用として収集・保存していたのであろう。

10 御代拝祝詞

本書が伝来した白川家は王氏で、平安末期以降神祇伯（神祇官の長官）を世襲し、伯家と称した。神祇祭祀を司り、『諸家々業記』によれば天皇の毎朝の御拝に故障が生じた際は、関白家もしくは白川家が御代拝を務めたという。本書は御代拝の時の式次第と祝詞を記した笏紙13枚が貼り継がれており、中には裏に「寛文元年八月五日ヨリ十一月二日ニ至ル」などのように、使用したとみられる年月日が銘記されているものもある。

[複本作成]



11

11 除目袖書尻付事

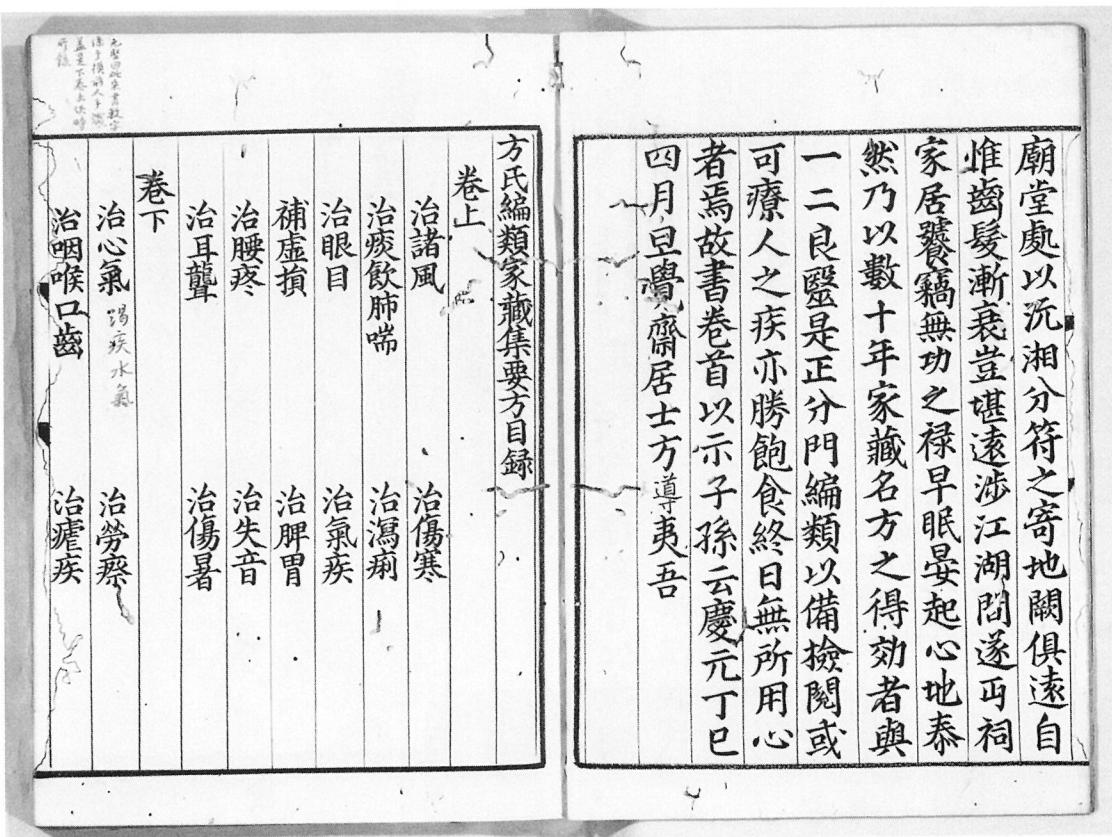
元和6年（1620）九条幸家写。除目の執筆が書く袖書や尻付の書様を記したものである。料紙の左右の端に「第一」「第二」のように丁付がなされており、本書は書写してから製本されたことがわかる。仮綴じの本にはこのような丁付が間々見られるが、本製本する時には裁ち落とされるのであろう。なお、本書には同名の九条道教筆（九-272、1巻）、九条経教筆（九-287、1巻）が先行本として存するが、当該本の本奥書からは道教筆本を写した経教筆本が親本であることが確認される。破損により判読不可能な箇所にはその旨の注記を付すなど、経教筆本を忠実に写している姿勢が窺える。

13 方氏編類家蔵集要方

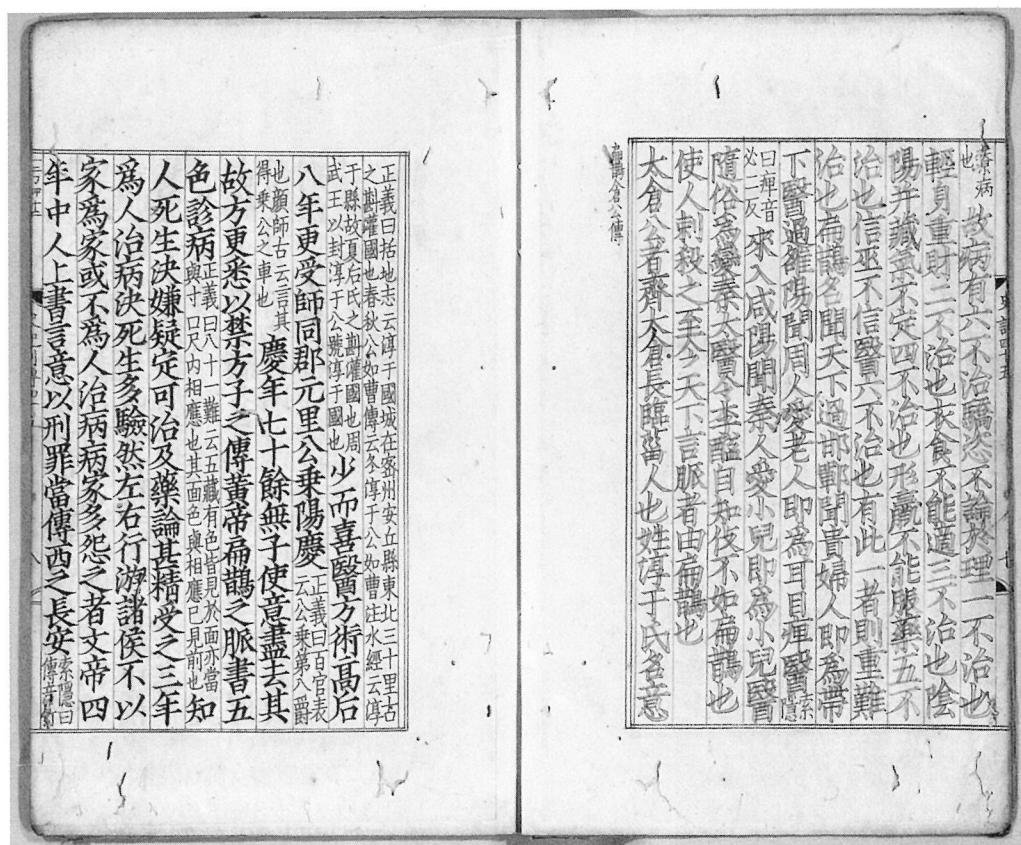
医書、宋方導編。巻頭には「多紀氏蔵書印」「江戸医学蔵書之記」等の蔵書印が、巻末には將軍徳川家慶の御匙医師を務めた多紀元堅による、天保14年（1843）10月の識語がある。料紙は麻と楮の交漉紙に、墨の浸透を防ぐための樹脂成分が塗布されている。宋版本を透写しており、本文はもとより宋版の胡蝶装の特徴でもある耳格、また匡郭、罫線、本紙の虫損箇所、埋め木と思われる箇所までもそのまま透写していて、親本の状態を具体的に知ることができる。

14 扁鵲倉公

「扁鵲倉公列伝」は司馬遷撰『史記』中列伝70編のうちの1編。扁鵲と倉公という名医の伝記で、中国における最初の医師の伝記である。先の13と同じく宋版本を透写したものであるが、大字の輪郭を透写し、後にその中を墨塗りして完成させる双鉤填墨の方法で書写している。理由は明らかではないが、ここでは一部を填墨するにとどめ、大部分を輪郭だけの双鉤字（籠字）のまま残している。書写の状況から、本書の親本は国立歴史民俗博物館所蔵、国宝『史記』（南宋慶元黄善夫刊本）と思われる。料紙は薄様の楮紙に膠が塗布されている。



13



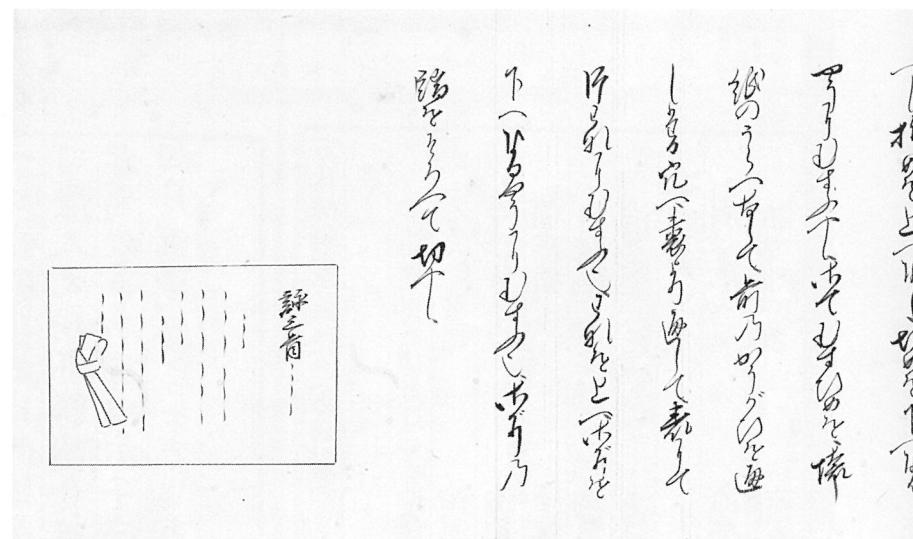
14

13

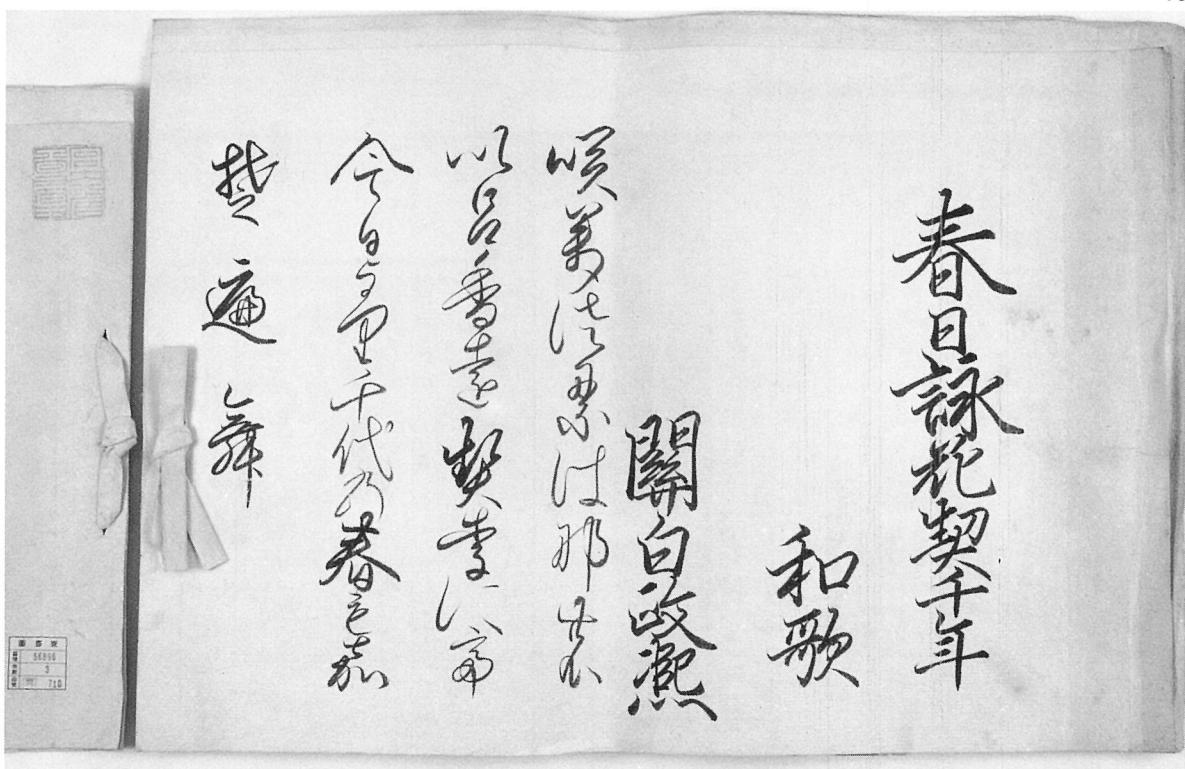
[綴じ方いろいろ]

15 和歌会席作法秘伝

河内国狭山藩第5代藩主で、文武両道に秀でた才能を發揮し、狭山藩中興の人として知られる北条氏朝が相伝した『古今伝受資料』27巻のうちの1巻。奥書によれば、正徳2年（1712）氏朝44歳の時に水田長隣から伝えられており、その内容は書名通り、和歌会における作法を所々に指図を交えて細かに解説したもの。展示箇所は「懐紙閉ルやう」の部分で、束ねられた懐紙の揃え方、綴穴の位置・開け方から、その綴じ方までが指図入りで説明されている。



15



16 鷹司輔平六十賀和歌懐紙

15で伝授されたのと同じ方法で、懐紙を綴じた実例。但し15では、懐紙の奥と上を揃えると記されているが、本資料では奥と下を揃える。他家に伝來した実例や、懐紙の綴じ方に関する他の史料によれば15の揃え方が一般的だが、鷹司家旧蔵の懐紙の多くが奥と下を揃えており、同家固有の揃え方が存在したかもしれない。

△ 傷紙圖より岩傷紙の書と号

ちひとをくわへまわらでうみや、

こよ下物とおゆすれのあら

はきかわすとまよすと聞す

おもておけりに石を下す事

おもておけりに石を下す事

おもておけりに石を下す事

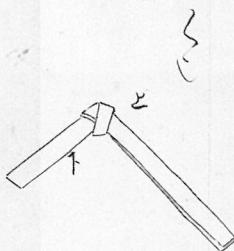
おもておけりに石を下す事

おもておけりに石を下す事

おもておけりに石を下す事

おもておけりに石を下す事

おもておけりに石を下す事



おもておけりに石を下す事

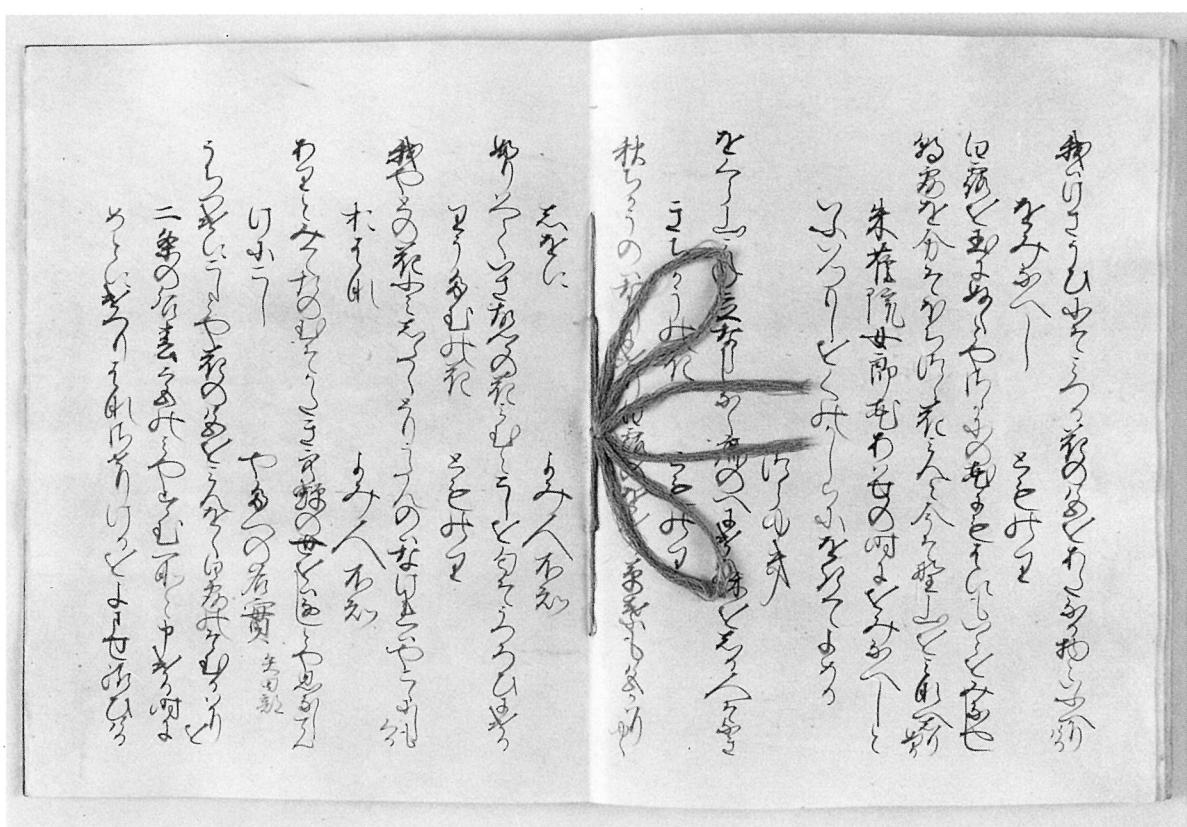
17



17 聞書

一名「鈴木三郎重家物語」。鈴木重家は紀伊国出身。源義経の家臣となって奥州落ちに同道した。彼と舍弟亀井六郎重清の活躍は『義経記』や『源平盛衰記』等にもみえている。また謡曲や狂言・幸若舞にも彼らの活躍を題材としたものが伝わり、本書も本文が仮名書きで数人の会話形式によって構成され、巻末に「すずき三郎しげいえ一ばん」とみえる。全9紙。前半5紙は雁皮紙、後半3紙は楮紙で、雁皮紙には浅い押界が引かれている。本書の装訂は紙釘装と呼ばれ、太めの紙継を4本表紙から裏表紙まで通して、本からはみ出た部分を叩いてつぶし、固定している。

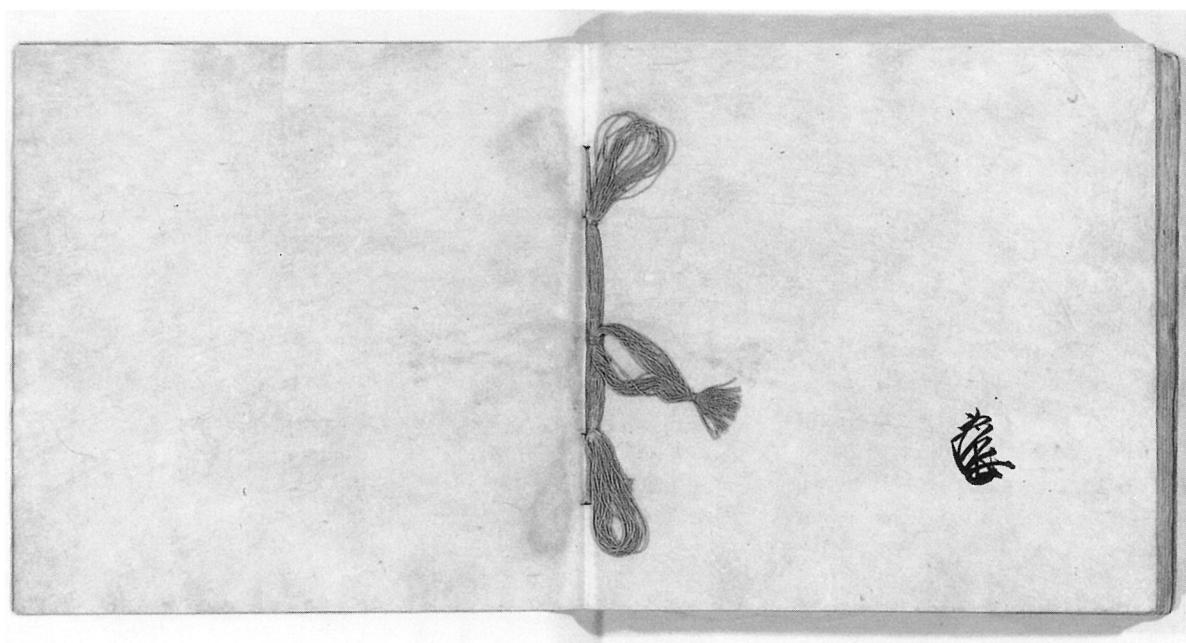
15



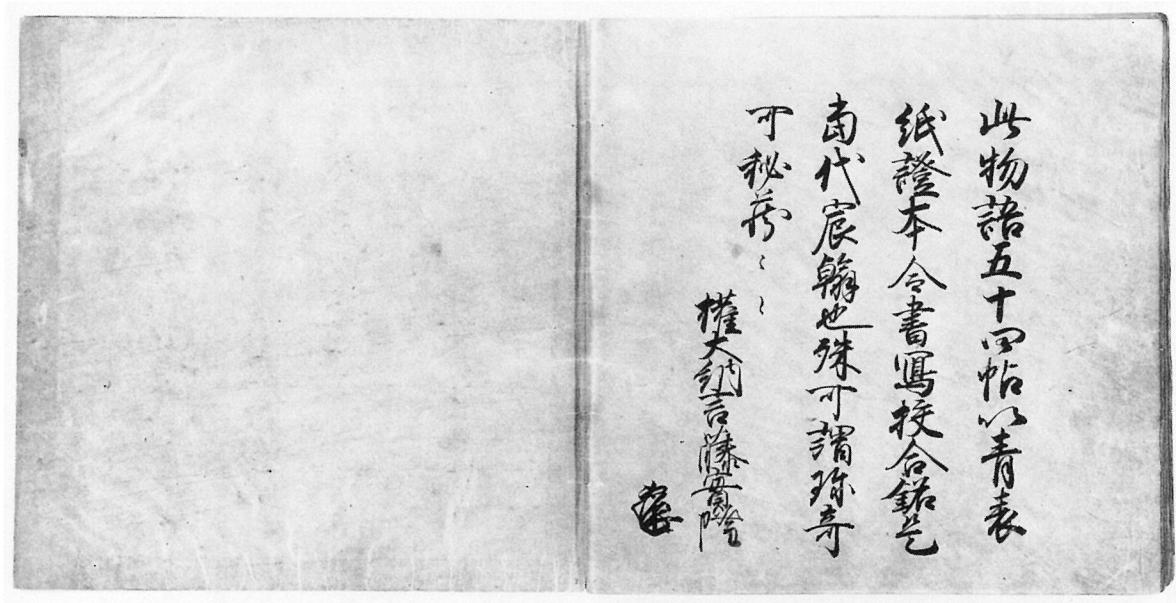
18-2

18 古今和歌集

四半本の列帖装（綴葉装）。二十一代集（カラー図版）のうち。列帖装は数括に糸を通し、最終括で結んで綴じる装訂で、写真はその綴じ目の部分。華麗に見せる為、中央の結び目に新たに糸を加えている（増し糸）。また結び目が料紙を摩損するので糸を打って柔らかくする工夫がなされている。古今集の本文は貞応二年本系統で、室町末期の写。奥書では「校本云」として貞応元年六月十日書写本の奥書の一部等を付している。ほかに「件本陸奥左近大夫将監申願今秘藏之処」云々とあるが、二十一代集を通して識語は無いので、本書の成立を詳らかにするものではない。各帖末に「杉原出雲」「盛安」の朱印あり。



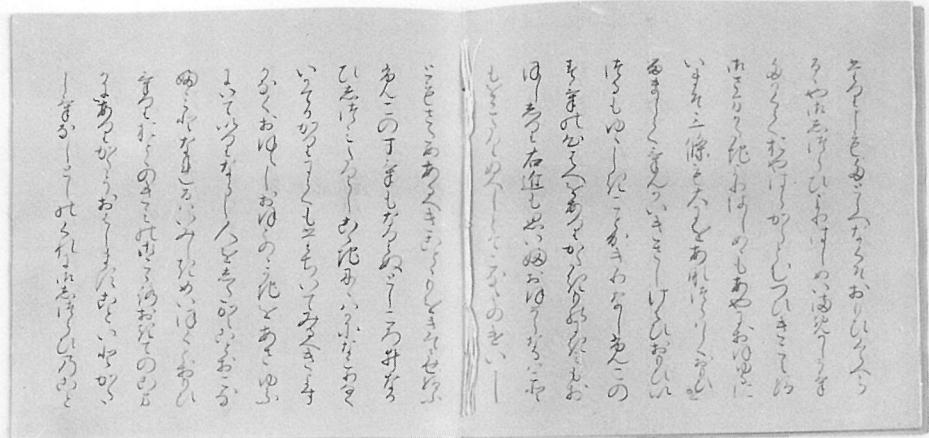
19-1



19-2

19 『源氏物語』のうち「桐壺」

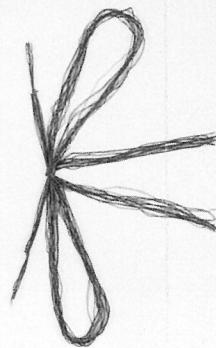
展示箇所の奥書から青表紙正本、または本巻同様「夢浮橋」巻末にも三条西実隆の奥書があり、他の巻にも実隆の花押があることから実隆奥書本、実隆加証奥書本などと呼ばれる。実隆が何者かの求めに応じ、周囲の堂上人や連歌師10余人に依嘱し成了った寄合書と推測される。そのためであろうか、きわめて華麗な綴じとなっている。



20

20 『源氏物語』のうち「玉鬘」

本書付の『筆者目録』から、当巻の筆者は平松時行と推定される。また『紙色目録』に「表紅、裏黄」とある通り、赤と黄の重ね色目で表紙と見返しを付ける。料紙は黄・赤・緑・紫・白の五色の色紙で、五衣の襟や袖の色目の重なり方の華やかさを、天地や小口に漂わせたものであろう。なお同時に展示した綴じ糸は、昭和7年（1932）に綴じ直された際保存されたもので、この原糸から旧綴じが、18『古今和歌集』と同様だったことが分かる。



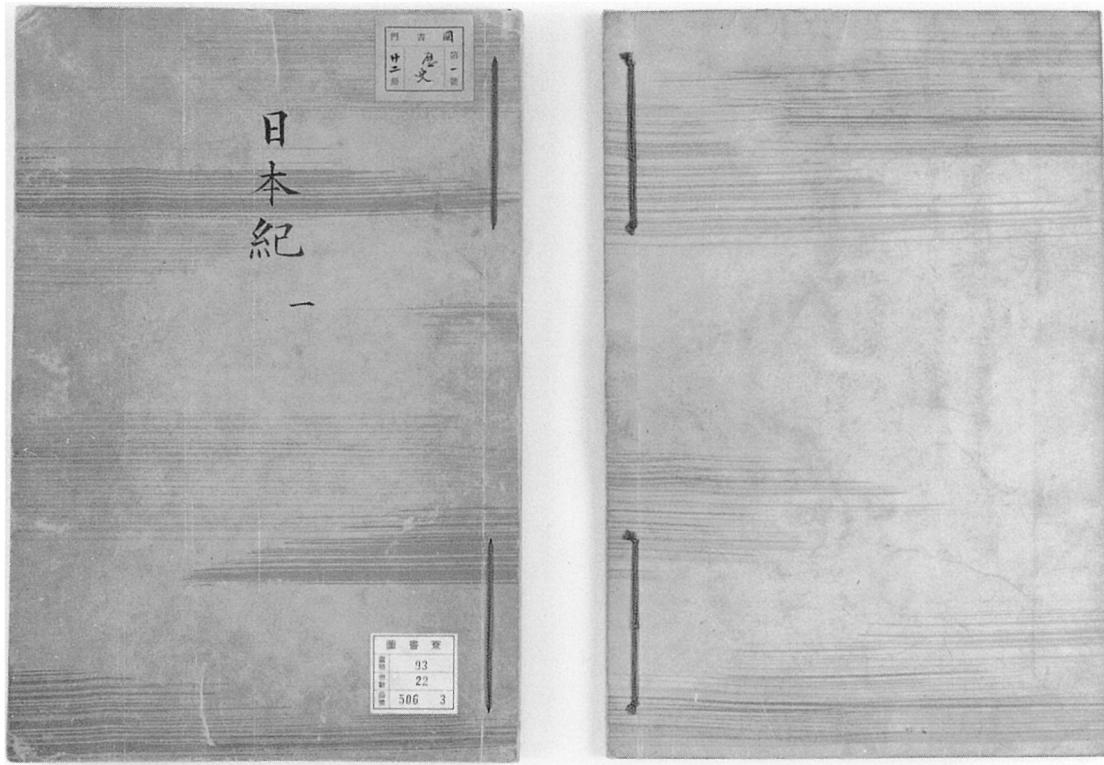
[装訂の呼称]

○通鑑司馬公 五經集註 唐本	書本也表紙黃色紫糸ムスヒトヂ 筆者凡岡三左衛門 五十人島葉左衛門 松平讚岐守	○和朝史記 日本後紀 本後紀 ○和朝史記 七部自述 水戸	白紙本帙純子崩黃中紋牡丹 唐草裏白練表紙コラセ四分一 彫物唐草 外題榊原玄輔
----------------------	---	---	---

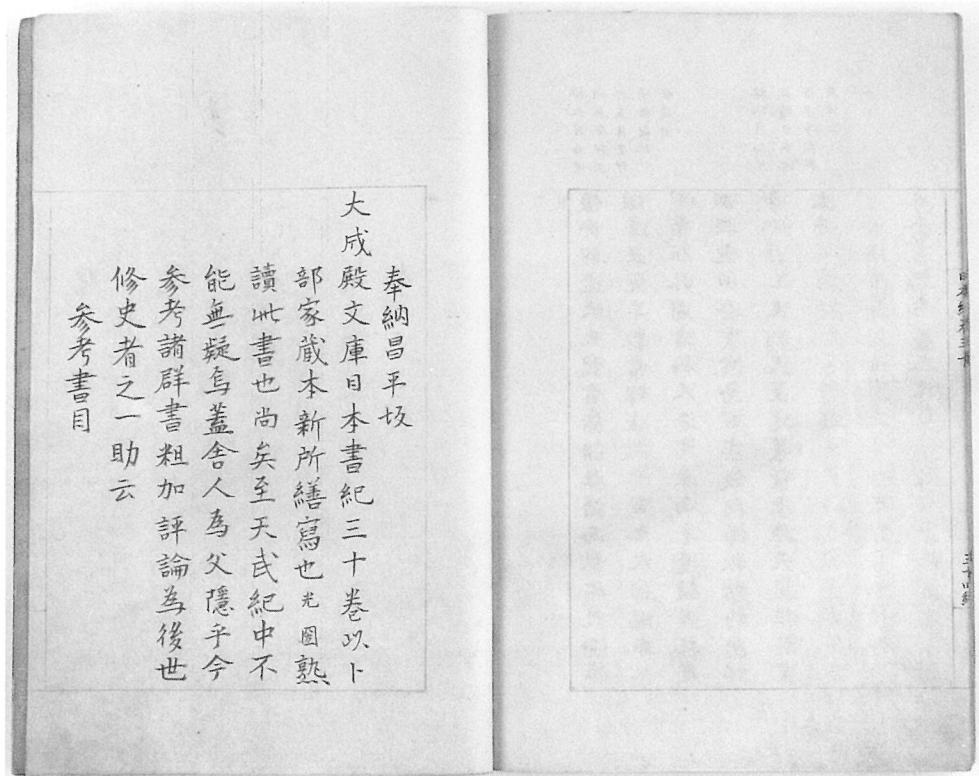
21

21 和漢名数大全

元禄8年(1695)に初版刊行された貝原篤信(益軒)の著した百科便覧。この中に徳川光圀が湯島聖堂に献じた写本の書名が挙げられ、装訂は「表紙黄色紫糸ムスヒトヂ」と記されている。



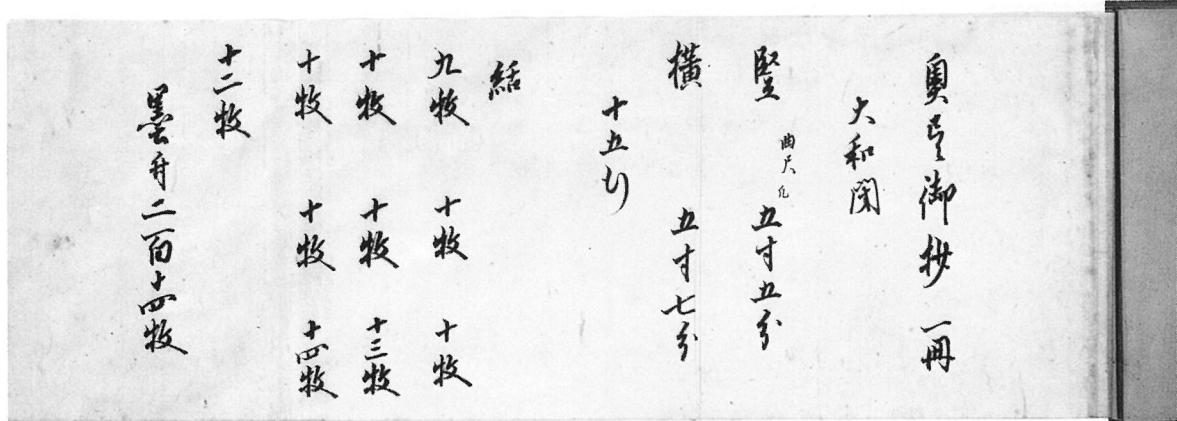
22-1



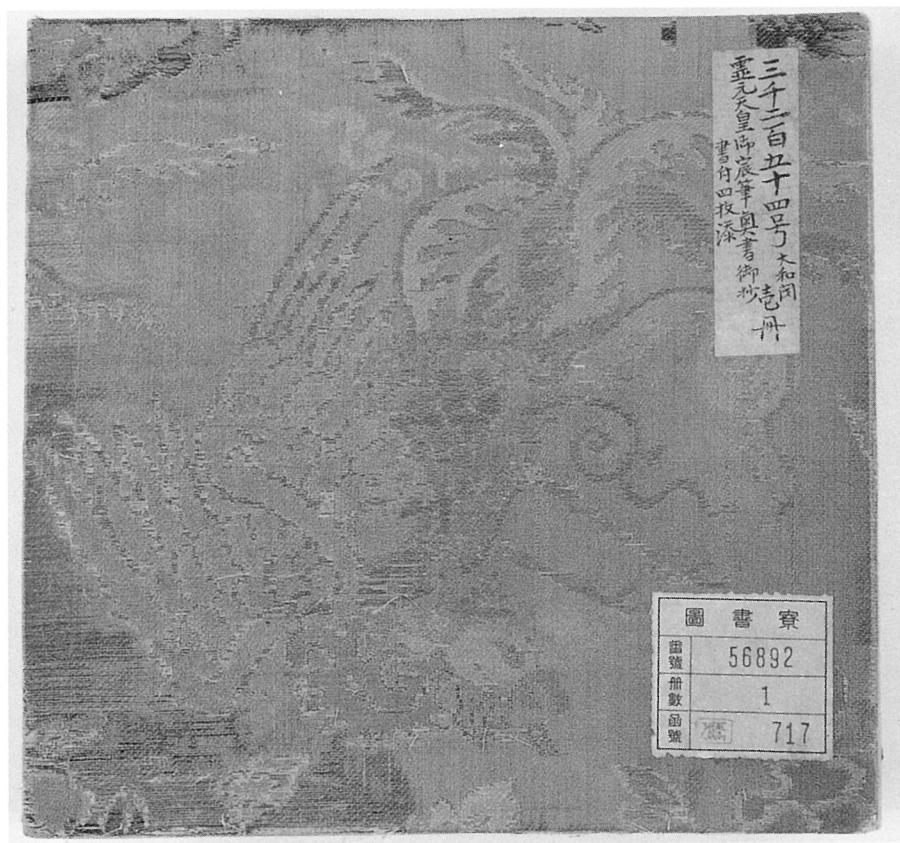
22-2

22 日本書紀

元禄4年(1694)徳川光圀が湯島聖堂に献じたうちの一本。表紙は黄檗染地に藍と緋で霞が描かれ、紫糸で綴じられており、21に記述されている通りである。国立公文書館・国立国会図書館に所蔵されている他の同時期献本も同じ体裁で、貝原益軒はこれらを「結び綴じ」と認識していたことが分かる。



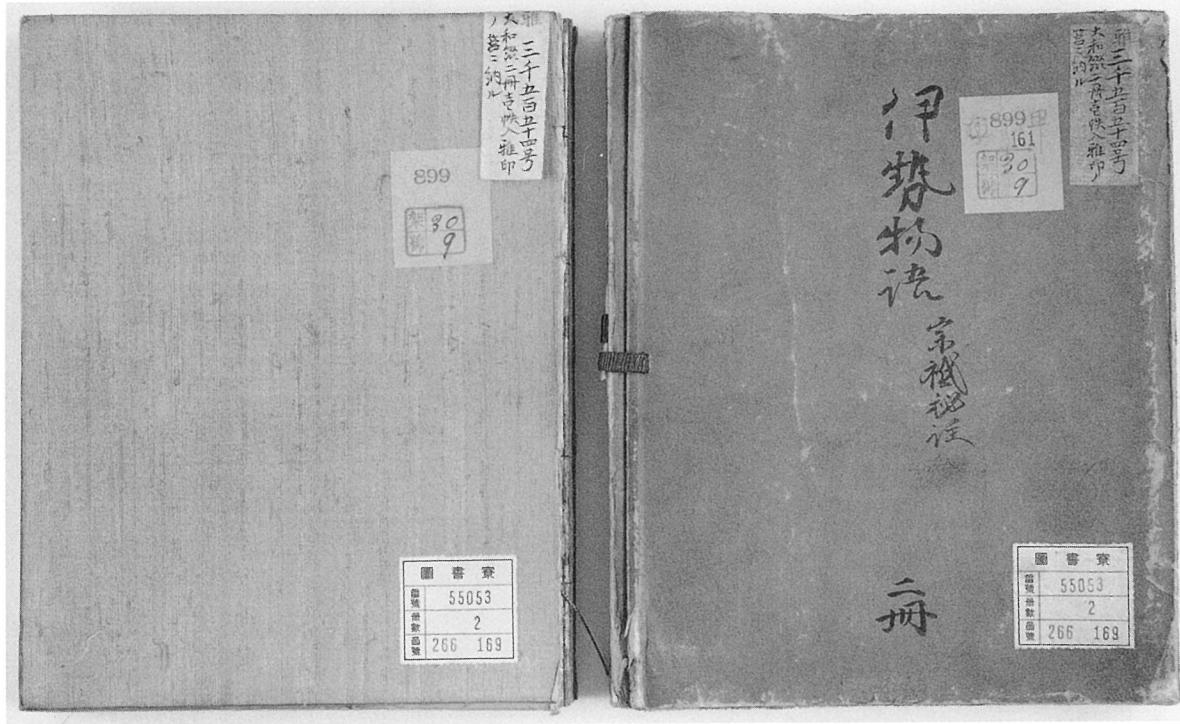
23-1



23-2

23 奥尽抄

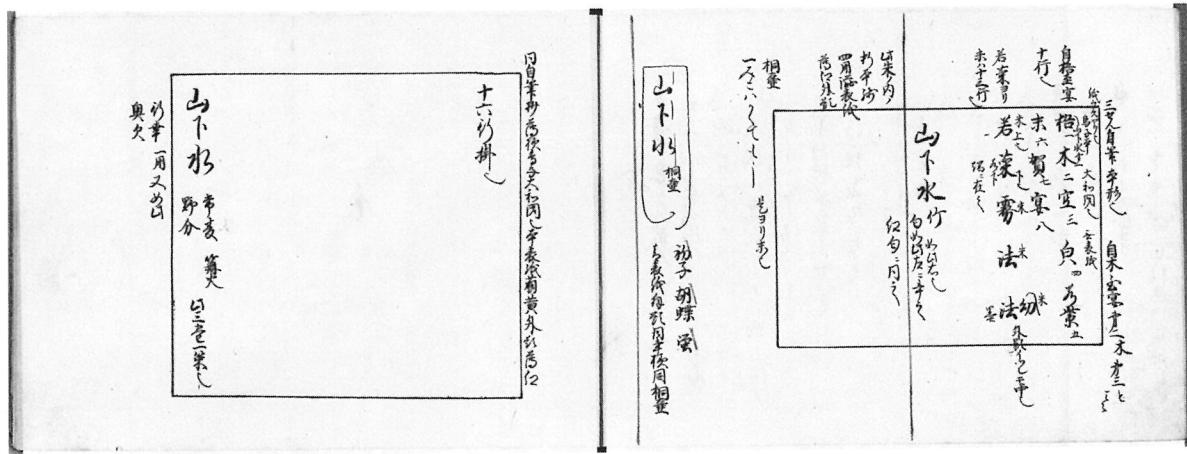
後水尾天皇の講じられた『伊勢物語』の注釈書。その烏丸光栄書写本を、鷹司政通が光栄の子孫光政から借り受け、政通嫡男右大臣輔熙の室崇子に書写させたもの。光栄本の貸借に関する折紙4通が添えられており、本書の装訂が「大和闇」と認識されていたことが分かる



24

24 伊勢物語聞書

『伊勢物語』の注釈書。帙の表書に「宗祇秘註」とあり、2冊目の奥に本書が鷹司家に納入された際に添えられていたと思われる切紙が貼られていて「宗祇法師ノ説」と見えるが、いわゆる宗祇講の『伊勢物語聞書』とは少しく内容が異なる。本書の装訂は今までいう列帖装（綴葉装）であるが、表紙に貼られた鷹司家の蔵書札には「大和綴二冊壱帙」と書かれている。

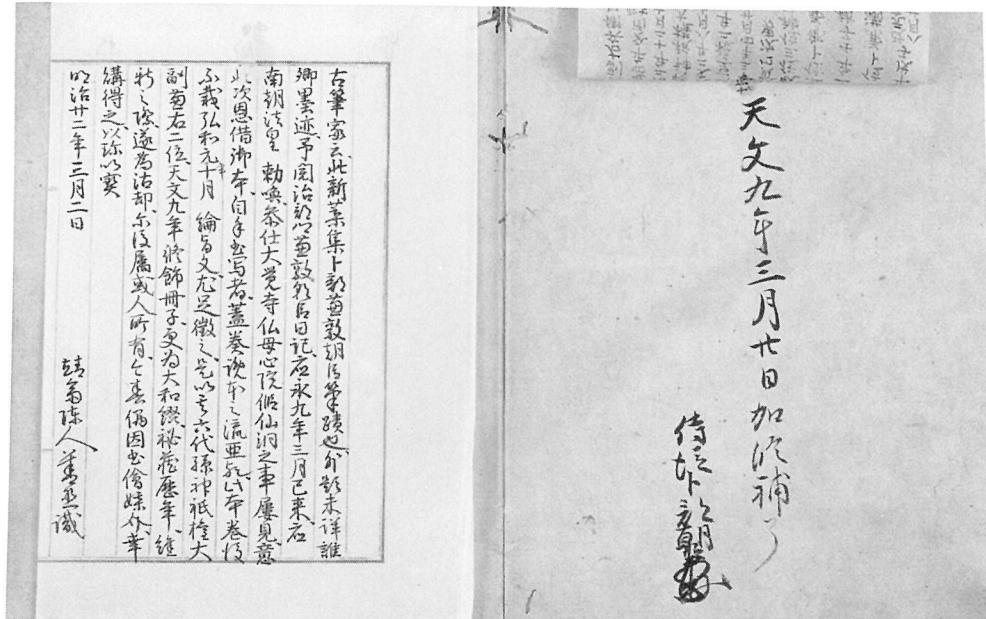


25

25 山下水

三条西実枝の作になる『源氏物語』の注釈書。展示本は慶長13~15年（1608~10）に中院通村が実枝自筆本を書写したうちの竹河巻の巻末で、親本の体裁が注記されており、実枝自筆本・同自筆抄とも「大和閉」であると書かれている。この親本は現在天理大学付属天理図書館にあり、一部改装されているが原装は列帖装（綴葉装）の仮綴本であることが判明している。通村はそれを「大和閉」と認識していたわけである。

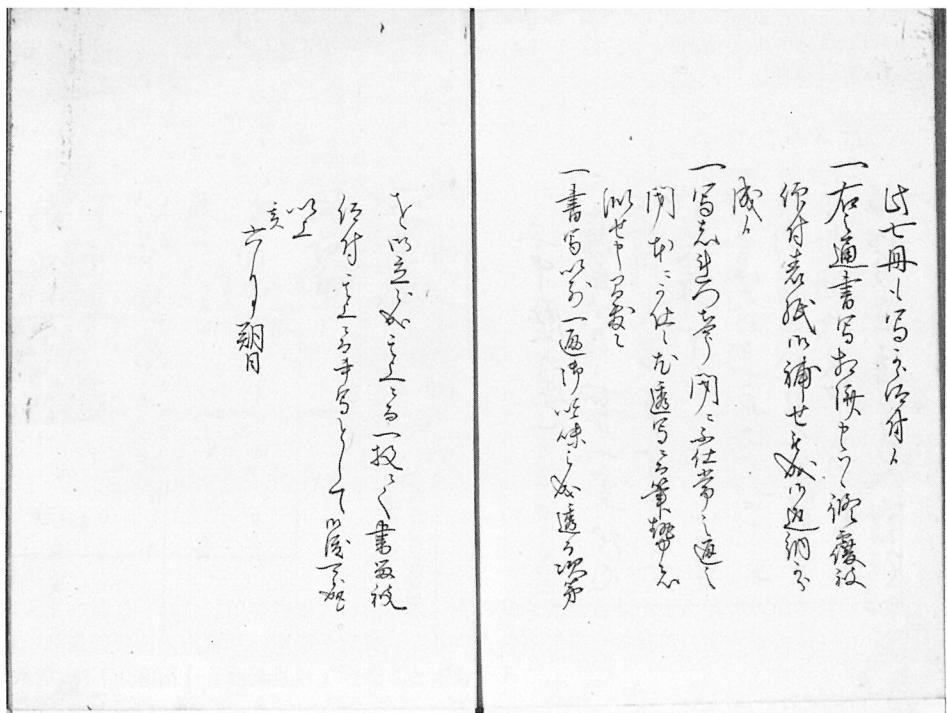
21



26

26 新葉和歌集

宗良親王撰による南北朝期の準勅撰和歌集。展示したのは天文9年(1540)ト部兼右の修補奥書を有する写本で、現装は列帖装（綴葉装）であるが、現状の小口に丁付と袋綴じの綴じ穴の跡が残り、折り目が喰い裂きして継がれている。本書入手した谷森善臣はこの改装が兼右によってなされたと解釈し、識語に「修飾冊子為大和綴」と記している。すなわち善臣の意識では本書の装訂は「大和綴」であった。



27

27 二中歴（付属切紙）

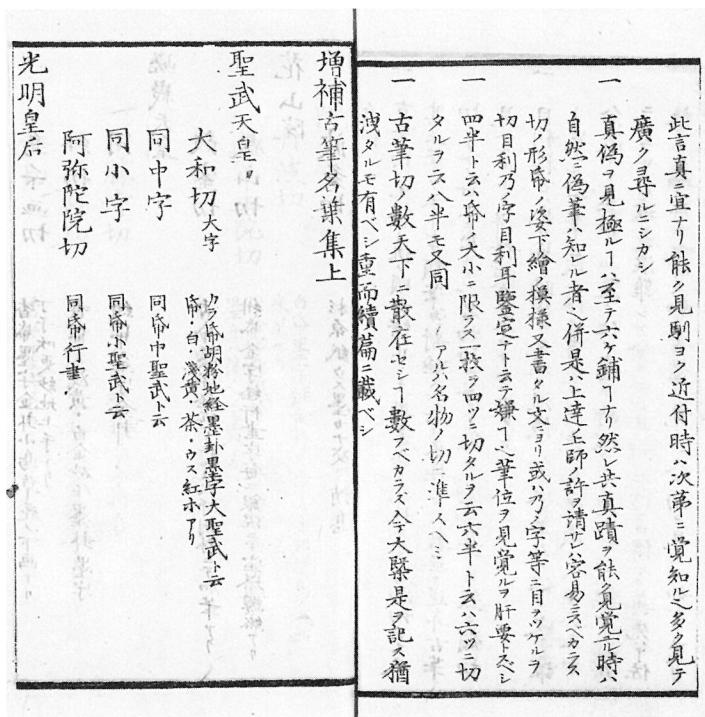
加賀藩前田家の許へ三条西家蔵『二中歴』鎌倉期古写本が到来した際に藩主綱紀が整理・修復を指示した切紙の写し。原装の粘葉装で現在前田育徳会尊經閣文庫に所蔵されているこの古写本の装訂が「れつちやう閉」と認識されていたことが分かる。

[本の大きさと紙]

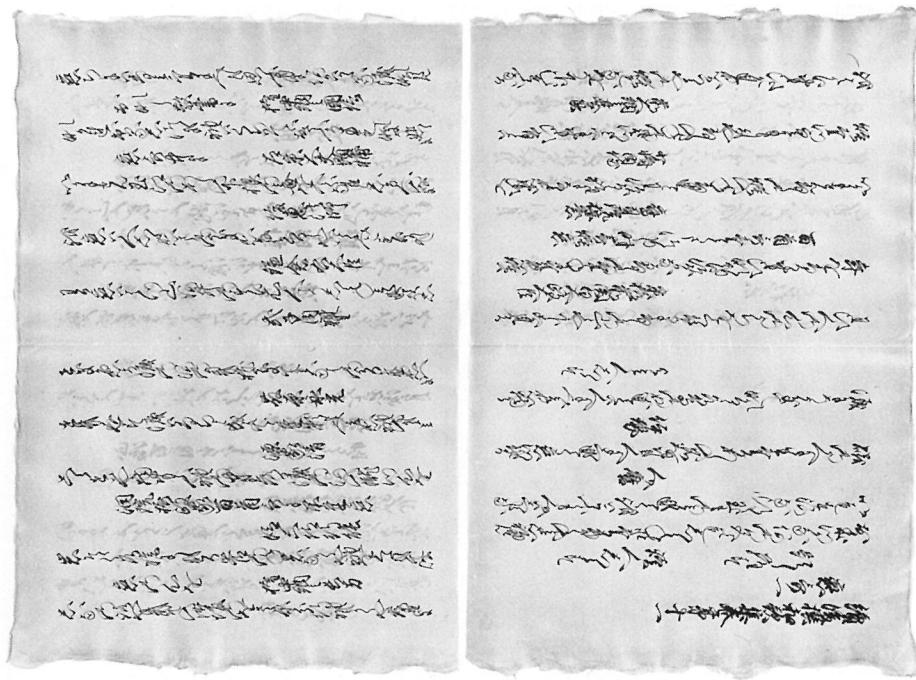
28 古筆名葉集

古筆切を伝承筆者別に切名・形状・内容などを記して通覧できるようにしたもの。『古筆名葉集』(陶々居、文化5年以前版行)を増補した安政5年(1858)の版で、塙忠宝の序を付す。凡例に「四半ト云ハ紙ノ大小ニ限ラズ一枚ヲ四ツニ切タルヲ云、六半ト云ハ六ツニ切タルヲ云、八半モ又同」とあり、これによって一紙を四・六・八等分して二つ折りにしたものが四半・六半・八半本とする説がある。しかし、それでは現存する四半・六半・八半本の大きさに合わない。

29~34を通して、一紙を二・三・四等分して二つ折りにした大きさが四半・六半・八半本であることを現状に即して示していく。



28

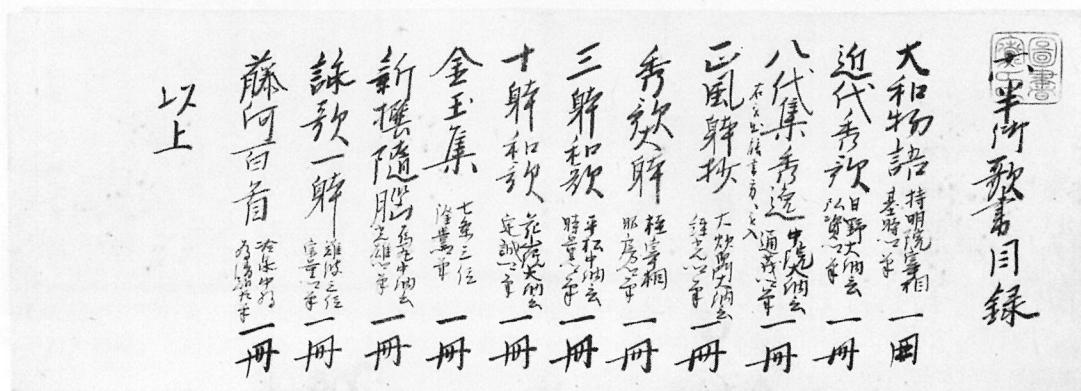
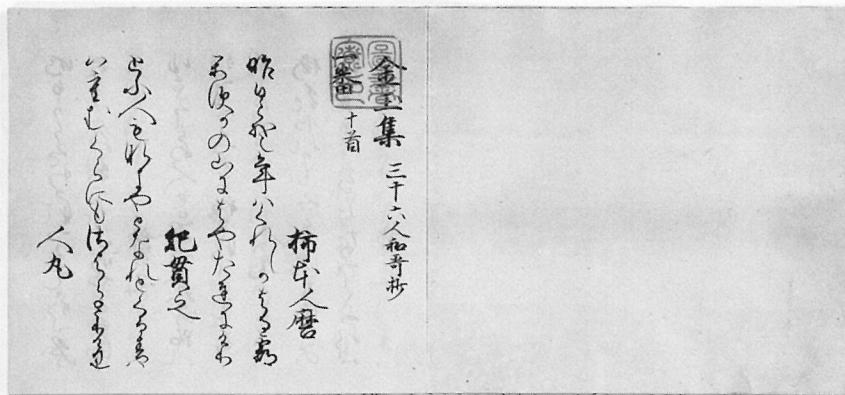


29

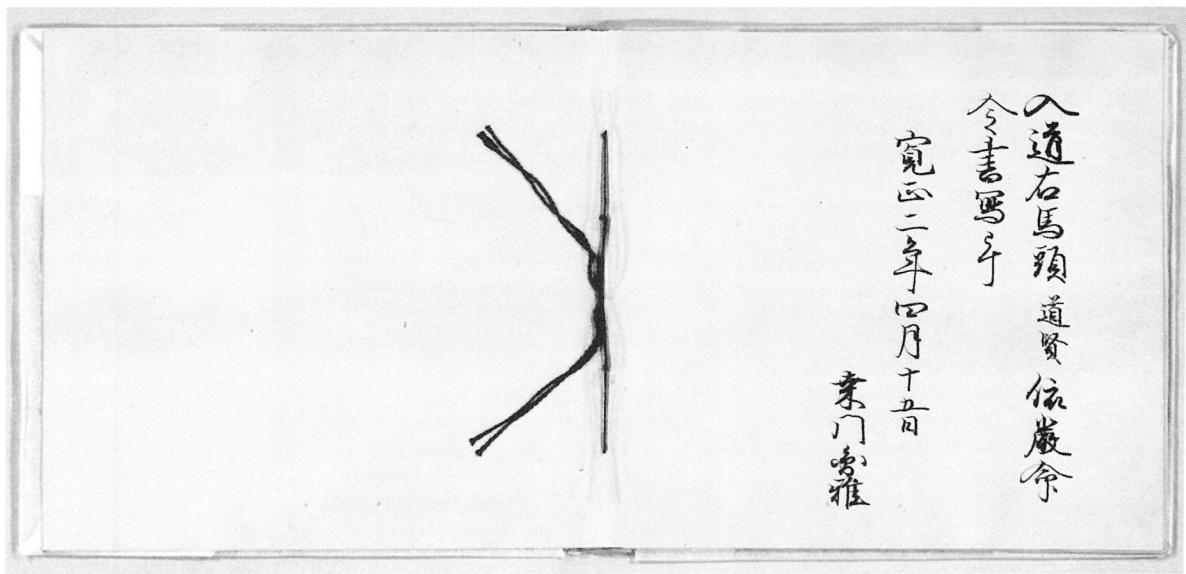
29 続後撰和歌集

鳥の子一紙の長辺を二等分に裁断し、そこを地にして折った本。よって当該本の見開きの二倍の大きさが全紙に相当する。これを化粧断ちすると四半本と言われる本の大きさになるので、四半本とは化粧断ち前の表紙の大きさが全紙の四分の一となるものを指す。なお、この体裁は本来の紙の横を縦に使用する。本書は『続後撰集』の巻11~19を智仁親王が書写されたもので若干の欠脱がある。智仁親王は後陽成天皇弟、細川幽斎から古今伝受を受け、また歌書等の書写活動を盛んに行われた(『古今後撰等抜書』503-142など)。『続後撰集』は第十番目の勅撰和歌集で、後嵯峨院の下命により藤原為家が撰し、建長3年(1251)に奏覽。

23



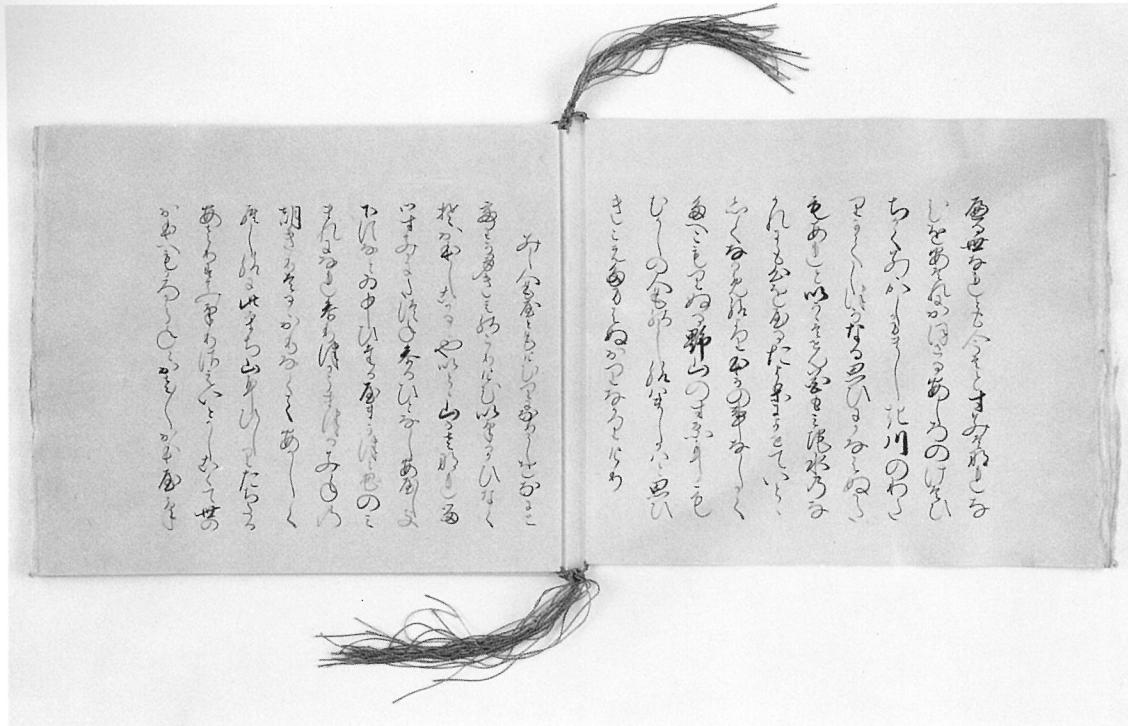
30-1



30-2

30 六半御歌書

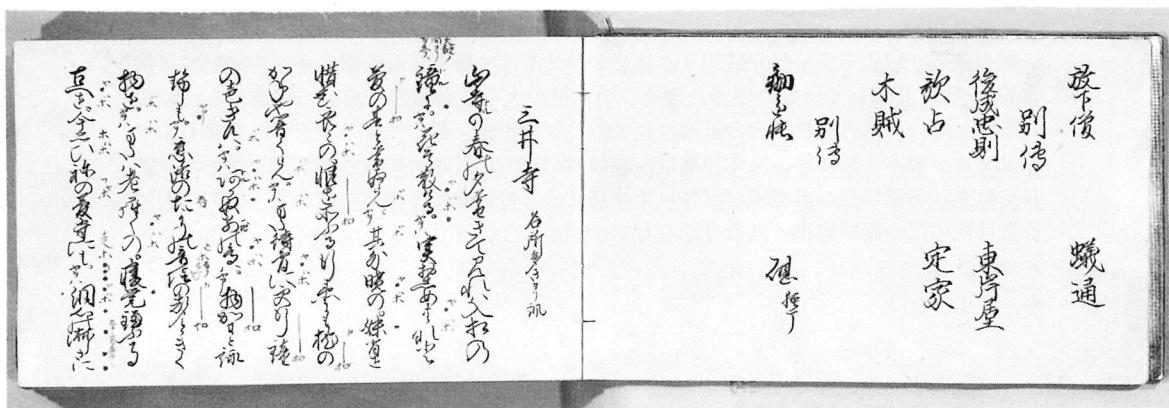
『大和物語』『近代秀歌』『三十六人撰』（目録には金玉集とある）など歌物語・歌学書を集めたもの。16~17.5cm四方の枠形の列帖装（綴葉装）で、江戸前期作成（後述）の筆者目録に「六半御歌書」とあり、江戸期の六半本も現代と同じ大きさを指すことがわかる。31参照。筆者目録と各帖の筆跡は合致し、官職名によって筆者目録の成立は延宝初年と思われるが、各帖が書写されたのは寛文8年(1668)に卒した冷泉為清の存生中となる。



31

31 『源氏物語』のうち「橋姫」

鳥の子一紙の長辺を三等分し、切り口を地にして揃え、二つに折った形態の列帖装（綴葉装）の未装訂の仮綴じ本。当該本を化粧断ちすると所謂六半本の大きさに相当する。よってこの形式が六半本を指すことになる。またこの体裁では、29同様紙の横を縦にして使用している。該本は『源氏物語』五十四帖のうち四十帖が現存する。筆者目録によれば閑院宮典仁親王以下の寄合書だが、目録が空白で筆者不明の帖もある。また各巻表紙の色目の目録によって、御所において既に装訂が決まっていたことがわかる。なお筆写の時期は、官職名から明和5年末～6年半ばに相当し、図版の橋姫巻を筆写した柳原紀光は明和6年(1769)4月16日の日記にこのことを記している。

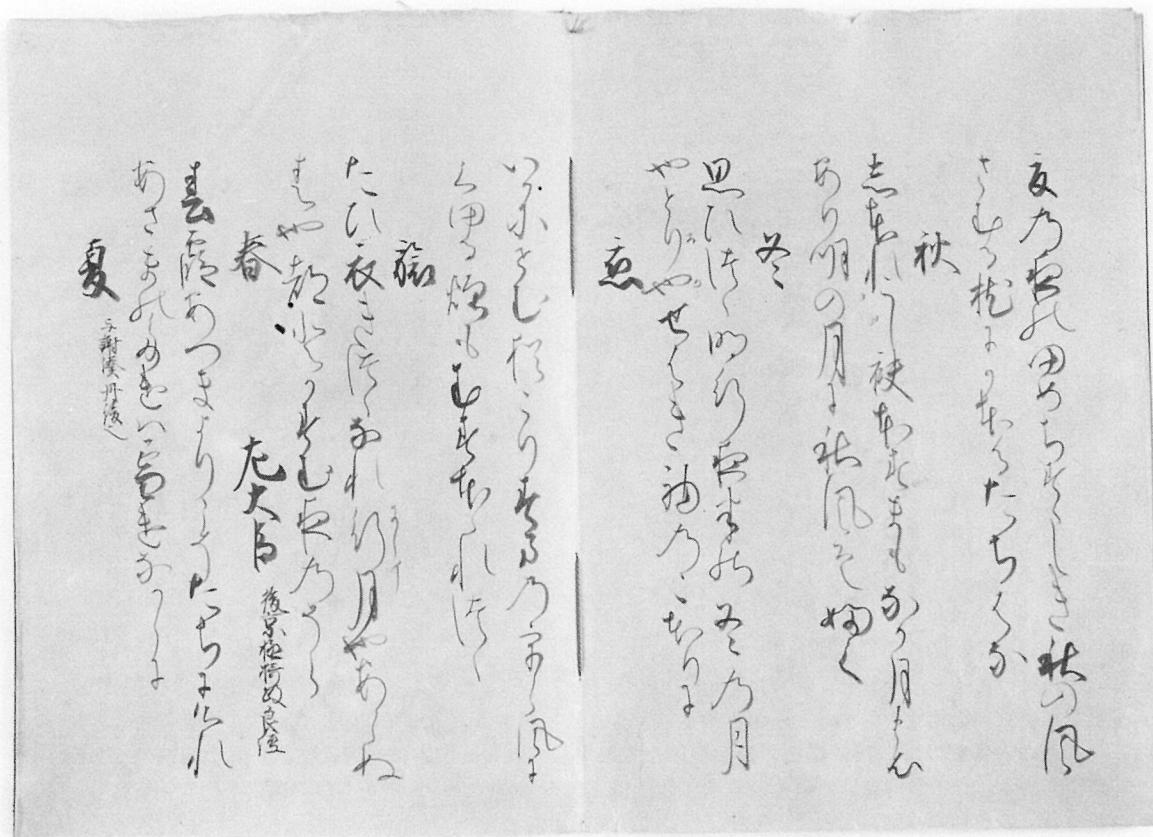


32

32 和鼓秘録

鳥の子一紙の長辺を四等分に切り、二つ折りにした横八半本。一紙の八分の一が化粧断ち以前の冊子の大きさに相当する。紙の本来の縦横を逆に使用した列帖装（綴葉装）。文政2～4年（1819～21）に受けた小鼓の幸清流の秘説と弘化4年(1847)以降の青木庸時の聞書を記す。譜は謡本文の脇に、主に朱、稀に青・緑を用いて記されている。

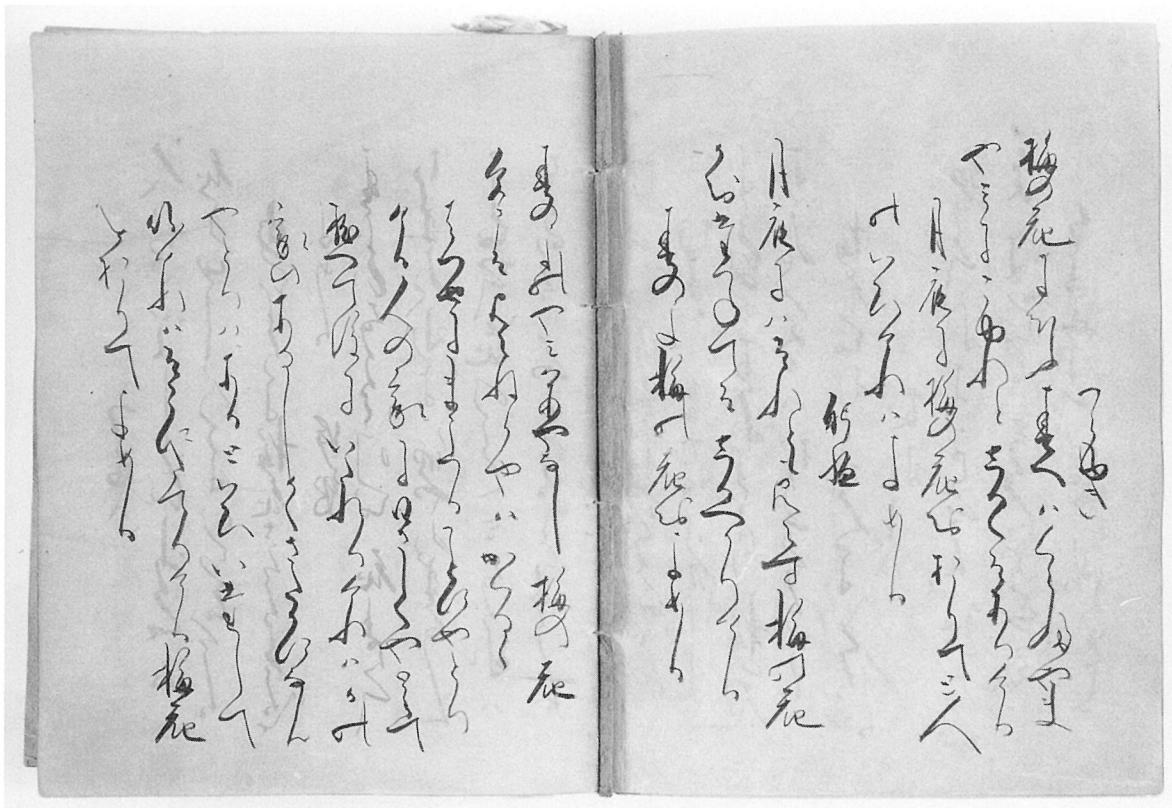
25



33

33 三体和歌

一紙の長辺・短辺を各二等分に切り、地を合わせて二つ折りにした縦八半本の列帖装（綴葉装）。化粧断ちしていないので、冊子の約八倍の大きさが鳥の子全紙に相当する。32横八半本と違い、紙の縦横は元の紙通りになる。写真中央、綴じ糸より上方に、仮綴じの糸が見える。橋本季村の写。三体和歌は、建仁2年(1202)3月20日に後鳥羽院が出題され、22日に詠進。各題は三つの様式（三体）で詠進せよとの仰せで、困難を極めた（『明月記』）。作者は院のほか藤原定家・九条良経などで全7名。

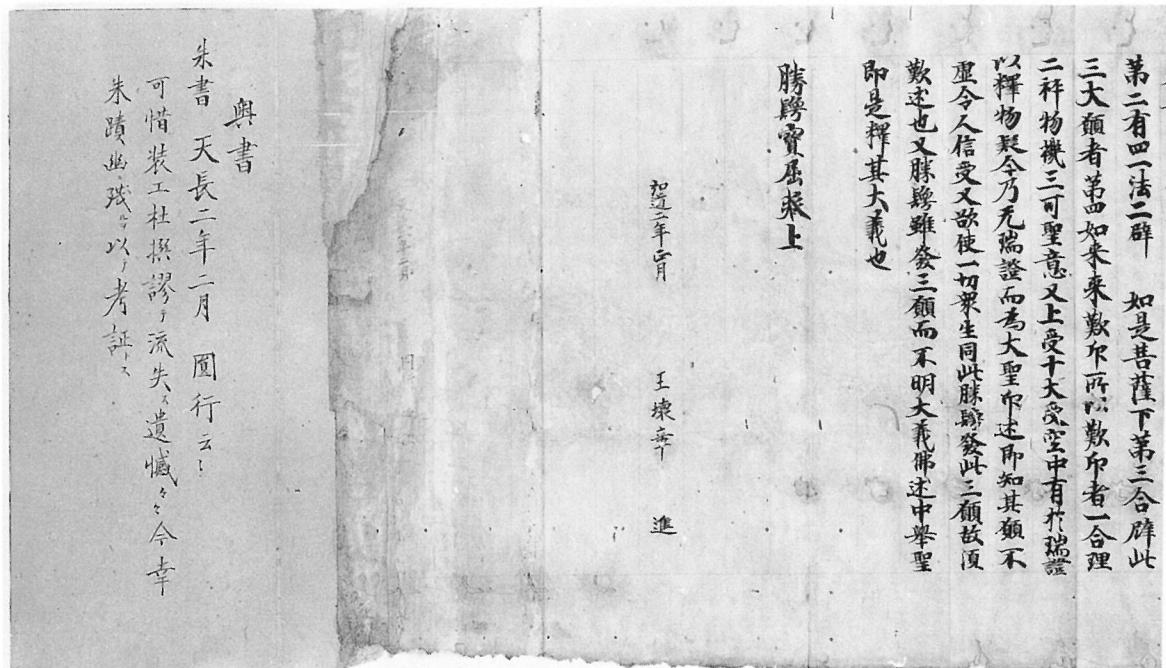


34

34 古今和歌集

鳥の子一紙の長辺を四等分、短辺を二等分した大きさを二つ折りにし、化粧断ちした袖珍本。八半本の二分の一の大きさに相当する列帖装（綴葉装）。展示本は柳原茂光が書写したもので、本文は最も流布していた貞応二年本系。但し本奥書はなく、墨滅歌・真名序の後に茂光男資行の識語のみを有す。識語に「右古今倭謌集我／先考茂光弱冠之／筆迹也嗟昔七十／年前手墨」とあり、これを信ずれば資行晩年の筆。巻十巻尾の括に白紙があり、巻十一巻首からの括の一枚目に「古今下一」（磨消）とあるので、上下に分冊する予定だったと思われる。なお、茂光の歌歴はあまり知られていないが、東照宮十三回忌法華經廿八品和歌に中院通村らとともに出詠した堂上歌人の一人。

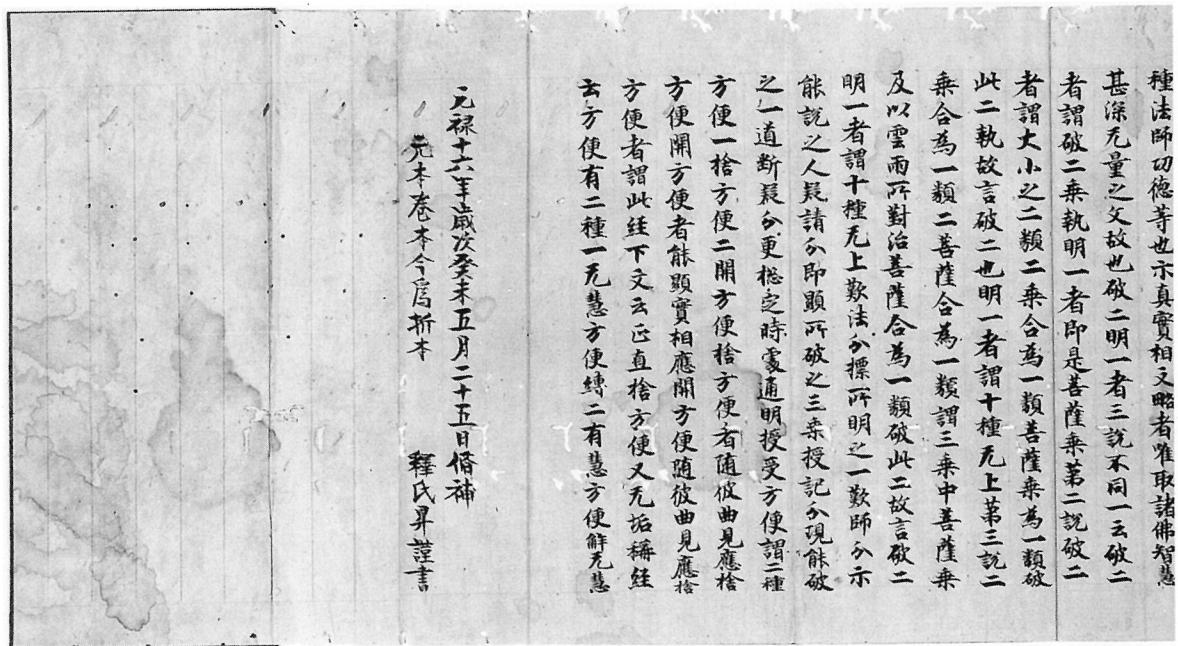
[様々な改装]



35

35 勝鬘宝屈

展示本は、唐の弘道2年(684)の年紀を有する勝鬘経注釈書（隋の僧吉藏の撰）の一つ。入唐僧の一人円行が所蔵していたものであることが、巻末の識語よりわかる。円行は、空海の弟子の一人で、承和5年(838)に入唐したが、翌年帰国。その後は播磨の大山寺等の開山となった。識語の意味するところは、他の入唐僧が将来した本書を天長2年(825)に円行が伝領したことであろうか。書写するために引かれた罫線などからみて、本来は巻子であったと推測されるが、利用の便を考え折本に改装されたものである。その時期については特定できない。年紀を有する当部所蔵本中最古のもの。

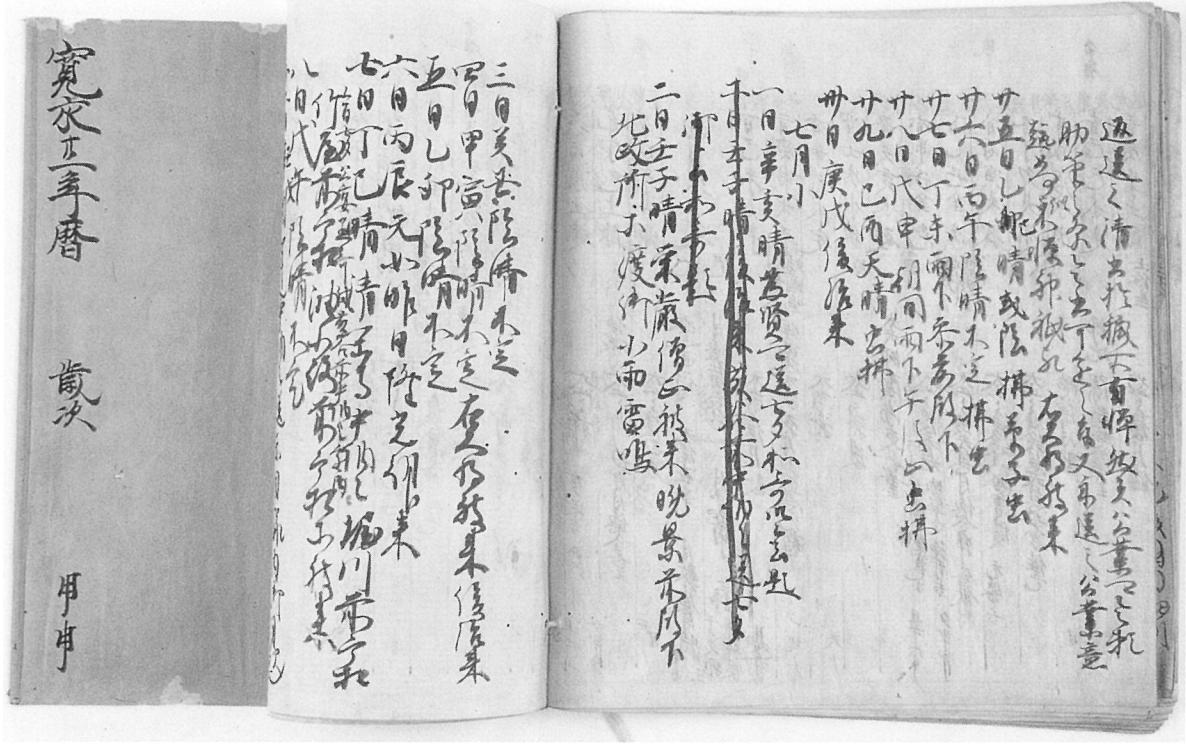


36

36 法華經論述記

展示本は、室町前期の書写にかかる法華經注釈書の一つ。新羅國の僧義寂の訳・義一の撰になるもの。卷末の識語に「元禄十六年歳次癸未五月二十五日修補、元本卷本今為折本釈氏昇謹誌」とあり、元禄16年(1703)に巻子を折本に改装したことがわかる。現在の折幅は約11cmであるが、子細に点検すると約16cm幅で折跡がみえ、また裏打紙等の状況から、これは元禄の修補時点での折幅であったものと考えられる。その後に現在のような折幅11cmに改装したものと推測される。その改装の時期は江戸後期であろうか。しかし、改装の識語を有する本書は貴重な存在である。

29



37-1

37-1 道房公記 卷12

展示本は、江戸初期の九条家の当主道房自筆の日記全15点のうちの1冊。平安以降の公家日記は、主として具注暦を利用し、その間空きに記文を書き留めるのが一般的であるが、経年した具注暦の紙背の白紙部分を利用し、記文を記すことが多い。本冊は、そうした例の一つで、寛永21・22両年の仮名暦の紙背を利用し、正保2年(1645)正月より7月までの記文を記している。その際、巻子状では不便であるところから幅約25cmに折りたたんで袋綴の冊子とし右端を紐で仮綴し利用しやすくしている。完成された書籍の改装ではないが、書写に際しての料紙の二次利用という点では興味深い事例の一つである。

37-2 道房公記 卷15

展示本は、同記15点のうちの道房自筆の『大礼一覧草稿』1冊である。同書は、道房が編纂した大礼=即位に関する部類記で、諸書より抜き書きし一書となしたもの。本書をもとに整序を正したものが九条家本に別に存しており、その草稿段階のものといえる。同書編纂にあたっては、寛永3(1626)・6・16年の具注暦の紙背及び寛永12・13・17・18年の仮名暦の紙背を用い、これらを袋綴の冊子状とし右端を紐で仮綴しているところは、先の卷12と軌を一にする。道房は、左大臣就任時期に後光明天皇即位の内弁を勤仕しており、そのための用意も周到であった。道房の作進した次第類は九条家本中に多く伝来し、また日記にも朝儀に関わる記事が多い。



紫禁東南行宮一處中大殿爲寶殿人稱之曰珠殿原太祖皇帝御名也

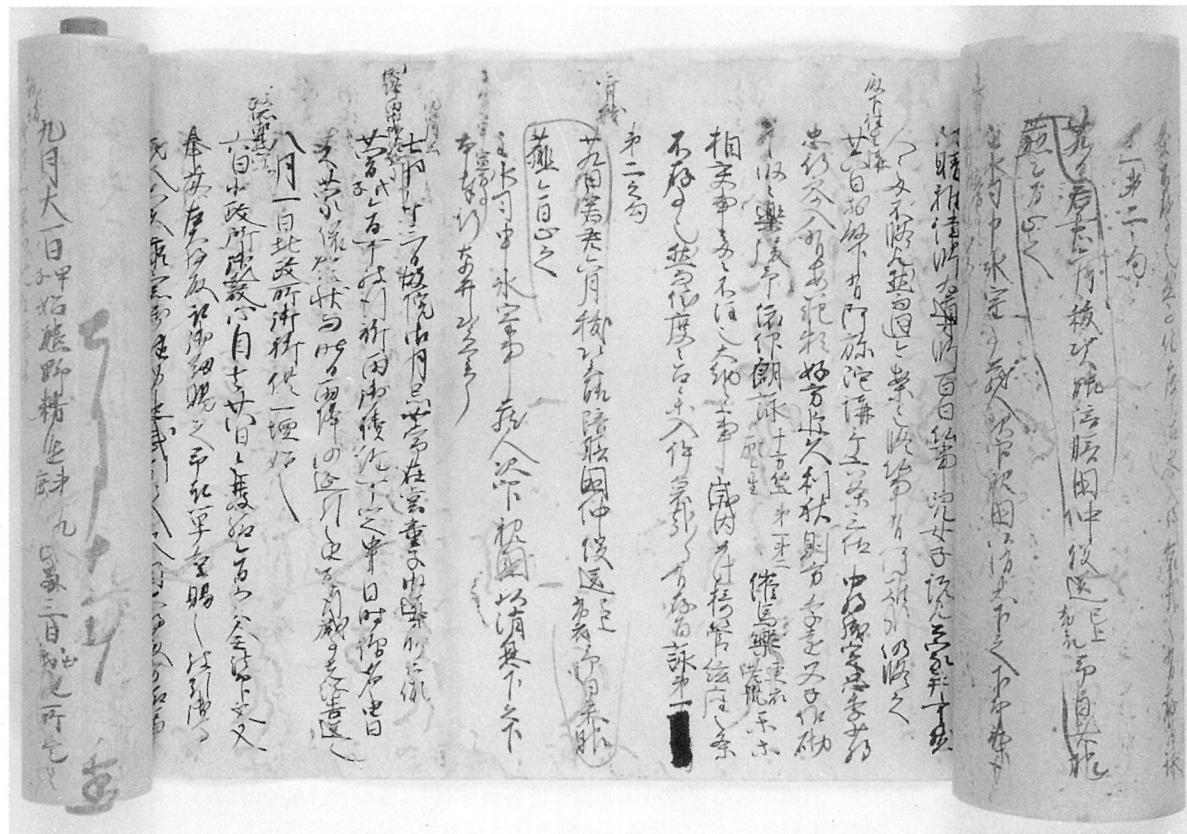
38-1

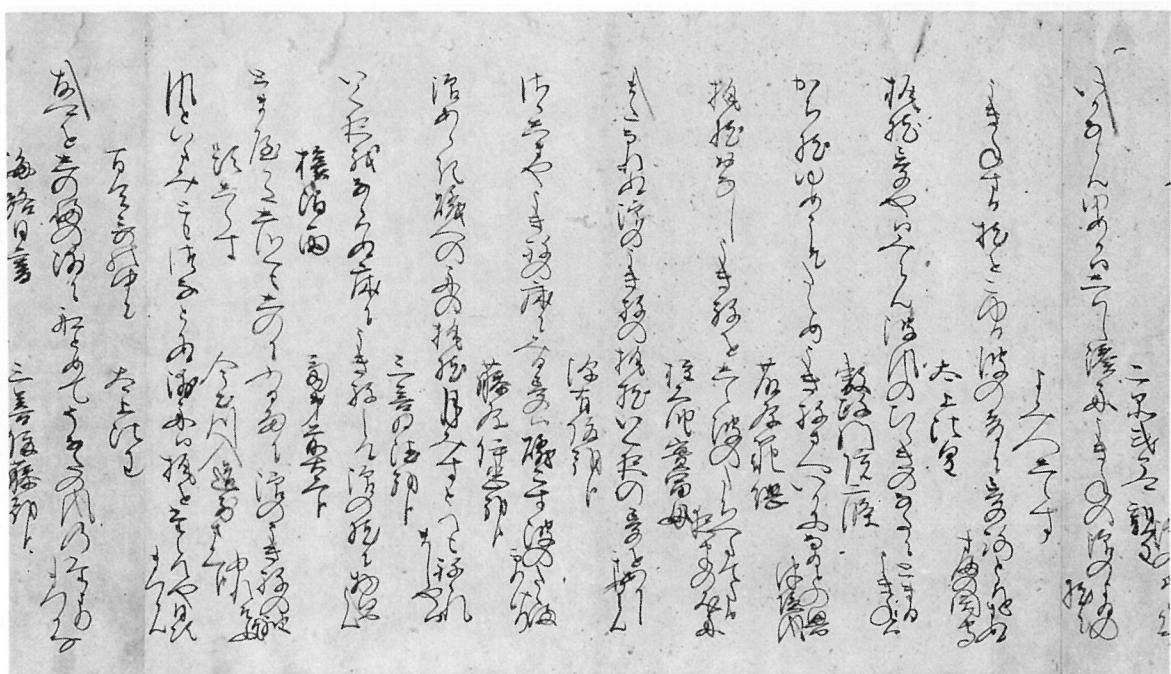
38-1 定能卿記部類 卷 3

展示本は、平安末～鎌倉初期の公卿藤原定能の日記の部類記で、鎌倉中期に書写されたもの現存10巻のうちの1巻。本巻は、東宮・中宮の行啓の記事を部類分けした巻である。現在は巻子ではあるが、料紙に折跡があり、また一紙の左右両端に綴じ穴の跡がみられるところから、かつては冊子の形態の時期があったことがわかる。一般に鎌倉期に作成された部類記等は巻子が主流であるが、本書も本来巻子として書写された後に、利用の便を考慮し冊子に改装されていたものと推測される。しかし、その後再び巻子に改装され、現在に至ったものであろう。先例調査に用いる部類記としては、冊子という形態が実用的であったのであろう。

38-2 定能卿記部類 卷8・9

展示本は、10巻のうちの2巻。巻順は当部で便宜的に付したものであるが、巻8は興福寺供養、巻9は仏事等を収める。図版は巻9で、本巻はかつては冊子の粘葉装であったものと考えられるが、巻子とする際紙背にまわってしまう部分を補うために書状等の裏を書写料紙として足し、裏になる部分の記事を新たに表に書写し直している。粘葉装を巻子とする場合、間剥（一枚の紙の表裏を分離させること）が可能であれば裏の記事を表にして継ぐことができるが、それができない場合は、本巻のような作業を要することとなる。時期は筆跡からみて書写者と同一人物の所為と考えられるので、当初書写した時期をさほど下らない頃と推測され、興味深い改装例の一つである。





39

39 和歌撰集

展示本は、伏見宮貞成親王の御筆・御撰になる歌集で、御自身と宮の周辺の人々の和歌を「羈旅部」として編纂されたもの。和歌134首を収めるが前次であり、本来どの程度の規模をもっていたのかは未詳。本書は、一紙毎の中央に折り跡がみえるところから本来袋綴の冊子であったと考えられるが、現在のような巻子に改装した際に、その折り跡を消すため一度袋綴の折り目に水分を与えて裂いて切り、縫維を絡み合わせて接続する喰い裂きという技法で、紙継ぎをしているのが特徴である。改装された時期は特定できないが、巻末に記された識語から、江戸後期であろうと推定される。また、冊子時の綴の部分は文字にかからないように切断され、当初より巻子であったような改装を施している。

父一母有疾憂心。醫藥。病者。不解。行不正。一寢所謂致其憂也。親既終。殘思慕。所號號斯讓。敬焉。下毛祖葬。所謂。

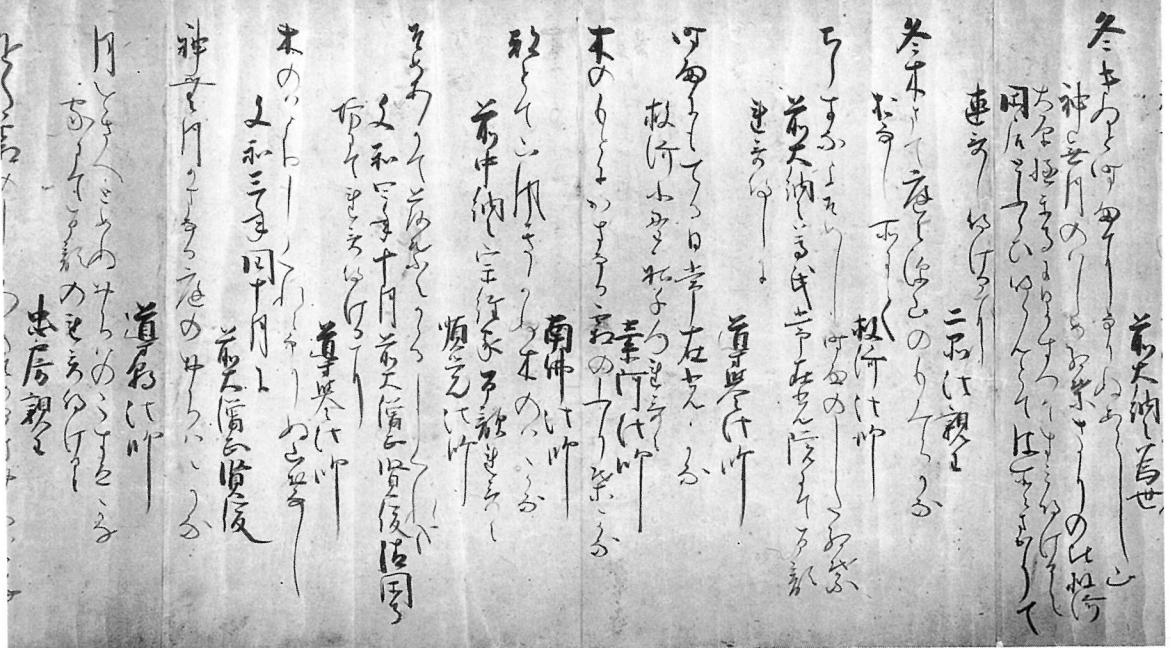
心竭其尊卑之敬所謂致其嚴也無所謂致其嚴也無五者備矣然後能事其親五者事之生之道二三其事也五者事之死之道三三其備也此謂能事其親也事親者居上不驕為下而不亂在醜不爭位上王者也

上而驕則亡爲下而亂則刑在
醜而爭則兵爲賊而無禮所以士
刑也爭而不讓所以不恭所以士
兵也謂兵刃見及卒也此三者不
除雖日用三牲之養疏爲弗孝
也三者謂驕亂爭也不除言在
三者在舅死士君至既卽受禍
父一母蒙惠雖日用三牲供養固
亂奉上命也不爭務和順也不居

40 古文孝經

『孝経』は、中国の戦国時代に曾子学派の学者が孔子と曾子との問答に託して孝道を述べたもので、そのうち漢の武帝の時代に孔子の旧宅より出現したテキストを『古文孝経』と称す。本書は、識語から中国宋錢塘の呉氏が永仁5年(1297)に本文を書写し、同7年に書博士清原教有が墨点を施したものであると伝える。野線を施した料紙の形態から、本来巻子であったと考えられるが、冊子として改裝するために本文にからないように裁断し、綴じ目に紙を足している。「祢家蔵書」の蔵書印から官務の小楓氏(壬生家)伝來のものであることが判明するが、表紙などの形態からみて、この改裝は壬生家によるものであると推測でき、その時期は江戸期であろう。

前大納戻世



41

41 菁玖波集

本書は、南北朝期の公卿二条良基の撰による連歌撰集で、延文元年（正平11、1356）の成立。展示本は、素眼なる人物の書写と伝えられる室町期の一本で、本来列帖装（綴葉装）であったものを巻子としたもの。列帖装は、料紙を数枚重ねて中央で折り、両面に書写したものを数帖合わせて綴じたものであるが、本書はこれを巻子に改装するため、料紙を折り目で切り、両面書写の本文を分離させるために間剥を行い、半紙分づつを継ぎ巻子にしたものである。第25・26紙目などには、隣紙の文字が映っており（影字）、本来は本文同士が表裏となっていた冊子であったことが裏付けられる。改装の時期は未詳。



42

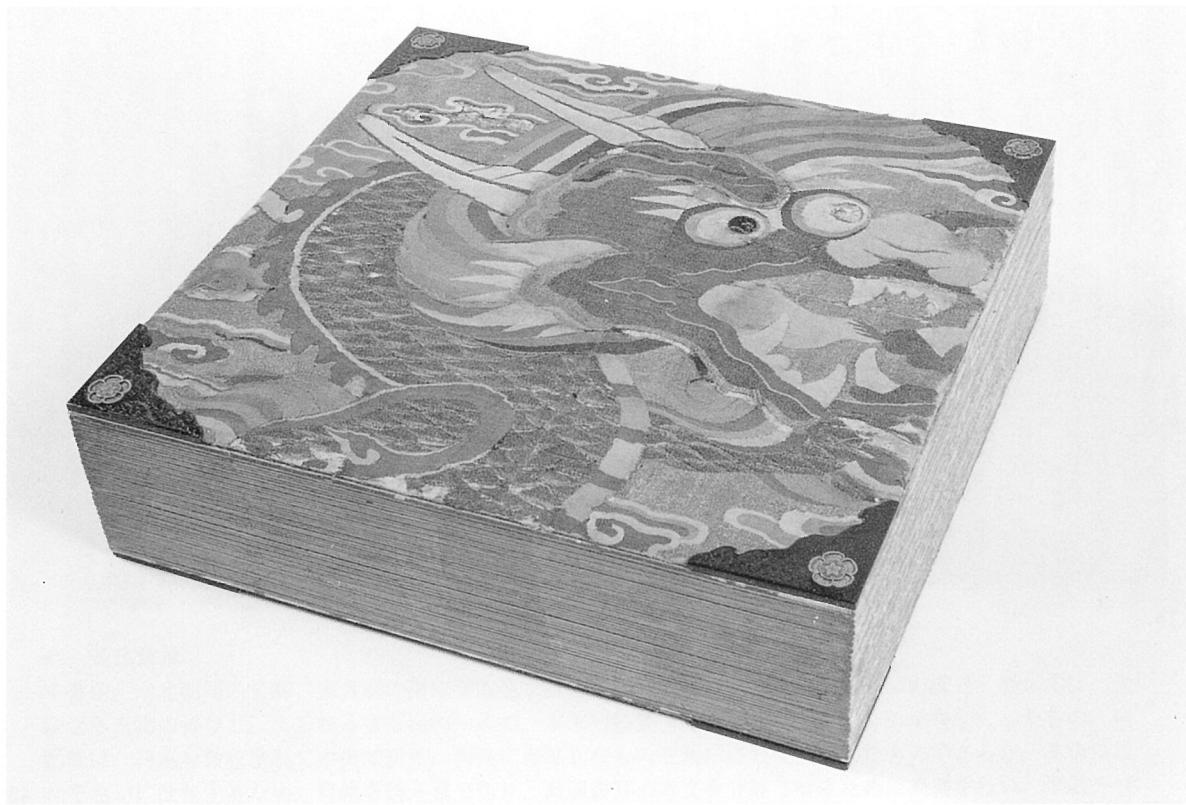
43 參軍要略抄

展示本は、鎌倉期の建保4年(1216)に成立したとされる有職書で、院の北面の武士としての院中公事に勤仕した経歴などを書き留めたもの。展示本は、南北朝期の書写本で、現存最古写本として位置づけられる。本書の紙背には、鎌倉期の尾張国堀尾・長岡両庄の一連の相論文書案が書写されており、それらが首尾整っているところからみて、本来仮巻の巻子であった相論文書案の紙背を使い、参軍要略抄を書写したものと推測できる。また披見の便を考慮し、折本として書写されたものと考えられる。現在の表紙及び軸は明治期の図書寮の修補により付されたものと考えられるので、巻子に戻されたのはあるいはこの時期ではあるまいか。

42 中右記

本書は、平安後期の公卿藤原宗忠の日記。展示本は九条家伝来の鎌倉前期の書写本。書写当初は巻子であったが、のちに折本とされた時期がある。折幅約25.5cmの屏風状に折られて谷折り部分は糊付けされた痕跡がある。また右端には紐で綴じられた跡があり、展示了紐はこれに付随したものと考えられる。この綴じ紐は、道房公記に使用されているものと同じであり、糊剥がれが起きていたものを、九条道房が綴じたものであろう。しかし、その後本来の姿である巻子にもどされたのである。その時期は特定できない。

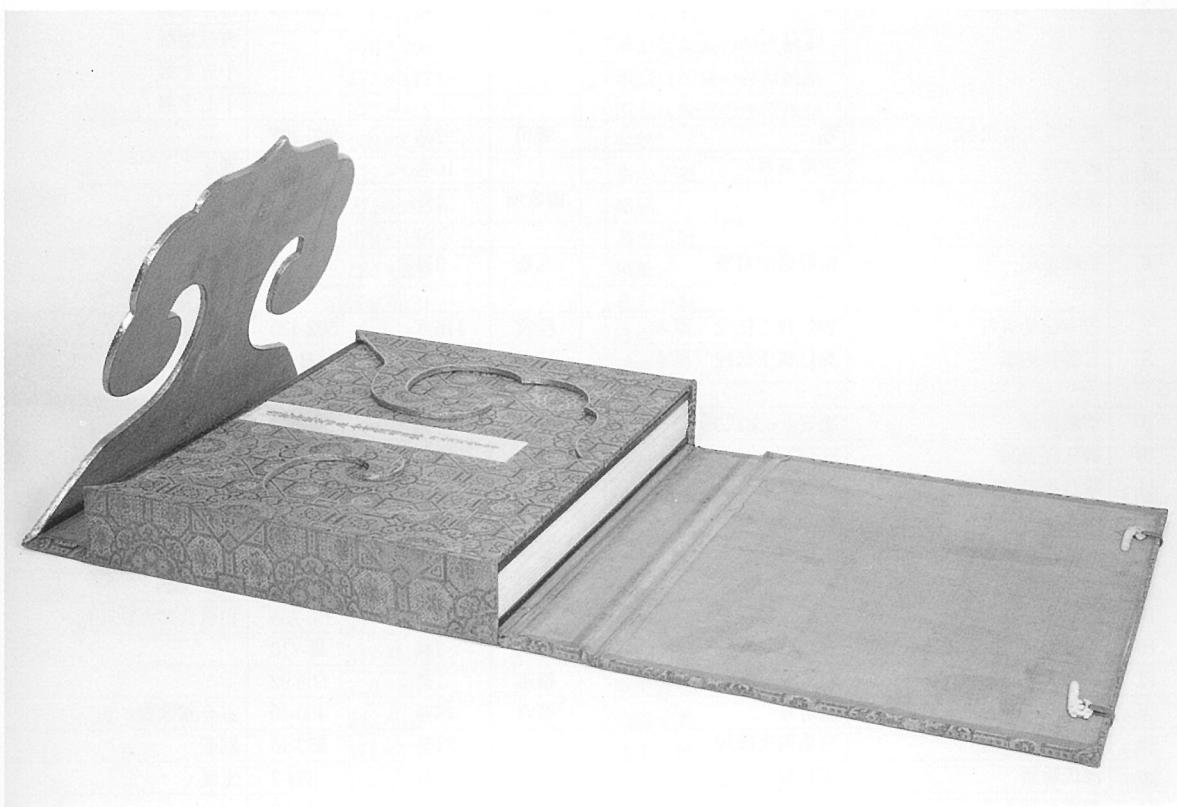
[参考展示]



44-1



44-2



45

45 四庫全書簡明目録

書籍を保護する帙の中で、天地まで覆いを付け、書籍全体を包み込むような形に制作されたものを折込帙という。当帙は爪のついている一番上となる側は一枚となっているが、折り込み部分の上下と左側が雲形となっており、嵌め込んで平らとなるような細工が施されている点が特徴的である。このように、中央で密着する折込帙の構造は書物が帙の上下からはみ出ることもなく、損傷や汚染を防ぐ。中には『四庫全書簡明目録』の複製が収められている。

44 手鑑

手鑑とは古人の筆跡（古筆）を貼り込んだものをいい、多くは展開ができる折帖仕立となっている。表紙に豪華な装飾が施されていることが特徴で、本帖の表紙は刺繡で龍を描いており、表表紙が頭、裏表紙が尾になっている。また、四隅には「五つ木瓜」の家紋入りの銀製の角金具があり、表裏にそれぞれ2枚ずつある見返しには四季の風景画4枚が描かれている。大聖武をはじめとする奈良期から江戸期までの著名な人物の古筆223枚（表105枚、裏118枚）が貼り込まれているが、台紙表面の雲母引の上には剥がされた跡が見られ、現装は貼り直しされたものであることがわかる。

39

展示本書誌デ一夕

番号	書名	刊写年代	旧蔵者	点数	函架番号	巻名等
1	源氏物語	九条道前等写	御所	40冊	554-13	篝火
						檜糸野
2	次第折帖竝紙界	写	鷹司	1帖	265-779	書写型紙
						書写型紙
						十五字野
						十七字野
3	祺子立太后次第	写	鷹司	2帖	265-397	
4	教訓抄	室町前写		10巻	503-255	卷 4
5	詩懐紙写	写	御歌所	1冊	210-732	
6	松殿御記					漠詩八行下敷
						第三冊
7	古今伝受資料	智仁親王伝受 原本	桂宮	116点	502-420	幽斎相伝之墨
8	三部抄切紙	典仁親王伝授 原本	日野	3枚	日-44	上包紙
						筆
9	笏紙類集	慶安4~文政3	鷹司	1帖	鷹-810	
10	御代拝祝詞	江戸写	白川	1帖	355-113	
11	除目袖書尻付事	元和6 九条幸家写	九条	1冊	九-5053	
12	玉葉	鎌倉写	九条	50冊		文治3年秋, 建久2年夏
13	方氏編類家藏集要方	天保写	多紀	1冊	276-378	
14	扁鵲倉公	写	多紀	1冊	276-376	列伝卷45
15	古今伝受資料	北条氏朝受等 原本	御歌所	27巻	B6-735	和歌会席作法秘伝
16	鷹司輔平六十賀和歌懐紙	寛政10 原本	鷹司	3綴	鷹-710	
17	聞書	室町写	橋本	1冊	508-92	
18	二十一代集	室町写	桂宮	48冊	400-10	古今和歌集 上
19	源氏物語	三条西実隆校		54冊	553-10	桐壺
20	源氏物語	江戸写	御所	55冊	554-7	玉鬘
21	和漢名数大全	天保13 弘化4 嘉永2版		3冊	106-3	
22	日本書紀	元禄4写	御所	22冊	506-3	
23	奥尽抄	安政4写	鷹司	1冊	鷹-717	
24	伊勢物語聞書	江戸写	鷹司	2冊	266-169	
25	山下水	江戸写	御所	22冊	150-692	
26	新葉和歌集	室町写	谷森	2冊	谷-468	
27	二中歴	明治写		4冊	275-147	卷 4
28	古筆名葉集	安政5版		1冊	162-11	
29	続後撰和歌集	智仁親王御筆	桂宮	1冊	457-142	
30	六半御歌書	江戸写	桂宮	10冊	553-15	
31	源氏物語	九条道前等写	御所	40冊	554-13	橋姫
32	和鼓秘錄	写	鷹司	2冊	266-803	
33	三体和歌	橋本季村写	橋本	1冊	353-876	
34	古今和歌集	柳原茂光写		1冊	405-98	
35	勝鬱宝届	唐 弘道2写		1帖	512-18	
36	法華經論述記	室町写		1帖	512-16	
37	道房公記	九条道房自筆	九条	15点	九-5119	卷12・15
38	定能卿記部類	鎌倉写	九条	10巻	九-112	卷3・8・9
39	和歌撰集	貞成親王御筆	伏見宮	1巻	伏-7	
40	古文孝経	永仁5写	壬生	1冊	503-168	
41	菟玖波集	室町写		1巻	503-224	
42	中右記	鎌倉写	九条	21点	F8-10	卷 7
43	參軍要略抄	南北朝写		1巻	512-29	下之卷
44	手鑑	平安~江戸写		1帖	E1-43	
45	四庫全書簡明目録	石版写真		1帖	B2-241	書套

装幀・形態等	寸法(縦×横) mm	紙質等	填料等	加工名
列帖装(綴葉装)未装幀六半本	173×203	鳥の子紙	入	打紙
檜板糸釘木枠	170×194×厚1.5	檜		
紙釘枠	215×198	鳥の子紙	入	
紙釘枠	218×200	消息反故紙の杉原紙か	入	
紙製糸釘枠	277×117	消息反故紙の杉原紙か	入	雲母引
紙製糸釘枠	277×118	消息反故紙の杉原紙か	入	雲母引
折本装	203×650	檀紙		
卷子本装	311×509	鳥の子紙	入	打紙
袋綴	271×203	楮紙	入	打紙
	279×186	鳥の子紙	入	
紙綴綴	285×224	楮紙	入	
	289×191	鳥の子紙	入	
		唐墨		
	373×530	檀紙		
	全長167,太さ3丸,穂先14	筆		
法帖形式	377×258	檀紙・楮紙・奉書紙・鳥の子紙	一部入	
法帖形式	385×194	楮紙・檀紙	一部入	
紙綴綴	279×208	楮紙薄様	入	打紙
粘葉装	258×161	斐楮交漉紙(溜漉き)	入	打紙
袋綴	294×209	楮麻交漉紙	入	打紙
紙綴綴	283×206	楮紙	入	打紙
卷子本装	179×506	鳥の子紙	入	
懷紙綴	417×611	檀紙		
紙釘装	120×86	雁皮薄様・楮紙薄様	入	
列帖装(綴葉装)四半本	242×182	鳥の子紙	入	打紙
列帖装(綴葉装)六半本	174×176	鳥の子紙	入	打紙
列帖装(綴葉装)六半本	164×173	色目鳥の子紙	入	打紙
袋綴	108×77	楮紙		
結び綴装	318×227	楮紙	入	打紙
列帖装(綴葉装)六半本	168×174	鳥の子紙	入	
列帖装(綴葉装)四半本	217×170	斐楮交漉間似合紙	泥入	打紙
袋綴	145×205	楮紙	入	打紙
列帖装(綴葉装)四半本	245×194	楮紙	入	
袋綴	265×191	三柾紙		打紙
袋綴	164×89	間似合紙	入	打紙
列帖装(綴葉装)四半本	264×391	鳥の子紙	入	打紙
列帖装(綴葉装)六半本	161×173	鳥の子紙	入	打紙
列帖装(綴葉装)六半本	171×203	鳥の子紙	入	打紙
列帖装(綴葉装)八半本	115×189	鳥の子紙	入	打紙
列帖装(綴葉装)八半本	189×132	鳥の子紙	入	打紙
列帖装(綴葉装)袖珍本	121×88	鳥の子紙	入	打紙
折本装	268×112	薄黄檗染め二層漉き穀紙(棍木)	入	打紙
折本装	268×112	薄黄檗染め楮紙	入	打紙
折本装仮綴	288×251	楮紙・間似合紙	一部入	打紙
卷子本装	333×482	楮紙・消息反故紙楮紙	一部入	打紙
卷子本装	273×379	楮紙	入	打紙
紙綴綴	255×208	楮紙	入	打紙
卷子本装	273×156	鳥の子紙(微量の楮を含む)	入	打紙
卷子本装	305×500	楮紙	入	打紙
卷子本装	283×409	楮紙	入	打紙
帖装本(伸帖形式)	385×400	麻紙・穀紙・斐紙・鳥の子紙・楮紙等		
如意式六合套	570×461×厚91	蜀江錦, 甲馳に雷文使用		

